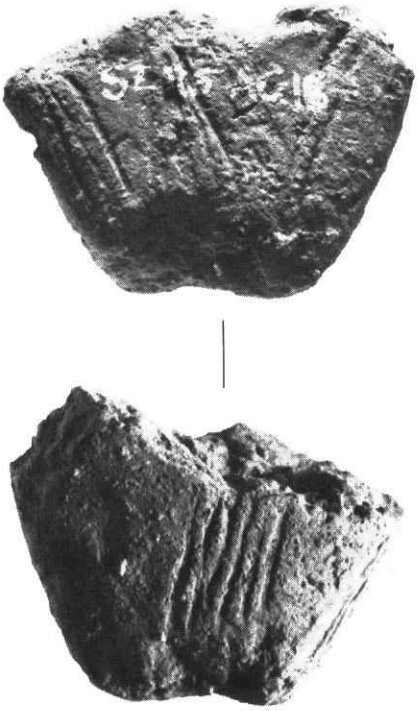
大船渡市清水貝塚発掘調査概報

（岩手県文化財調査報告　　第23集）

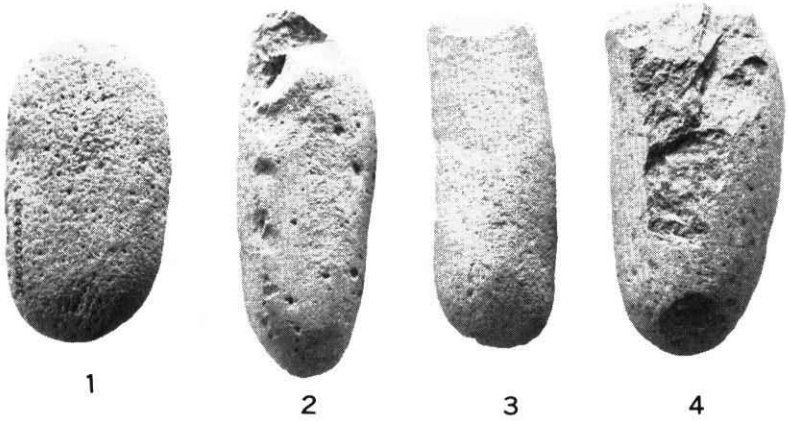
昭和51年3月

岩手県教育委員会

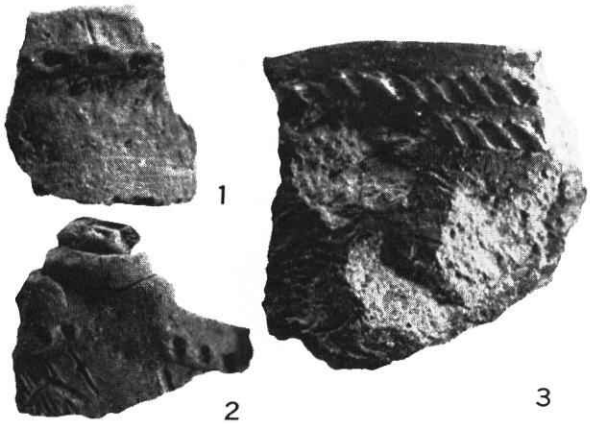


1

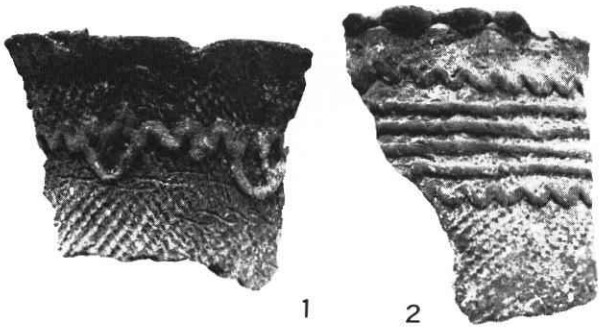
2



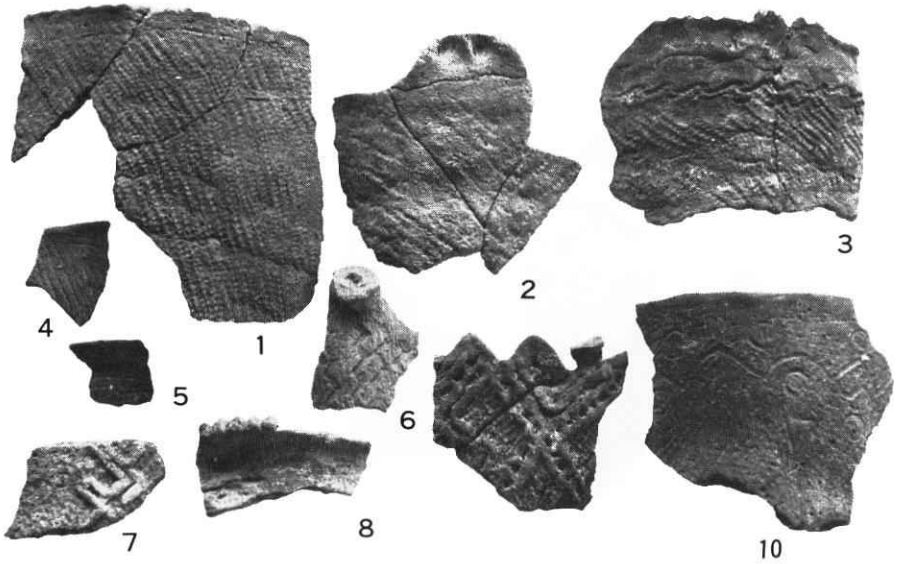
中央落ち込み出土の遺物
1．土偶（×1）
2．敲石（1．は西斜面a－b間層）



1



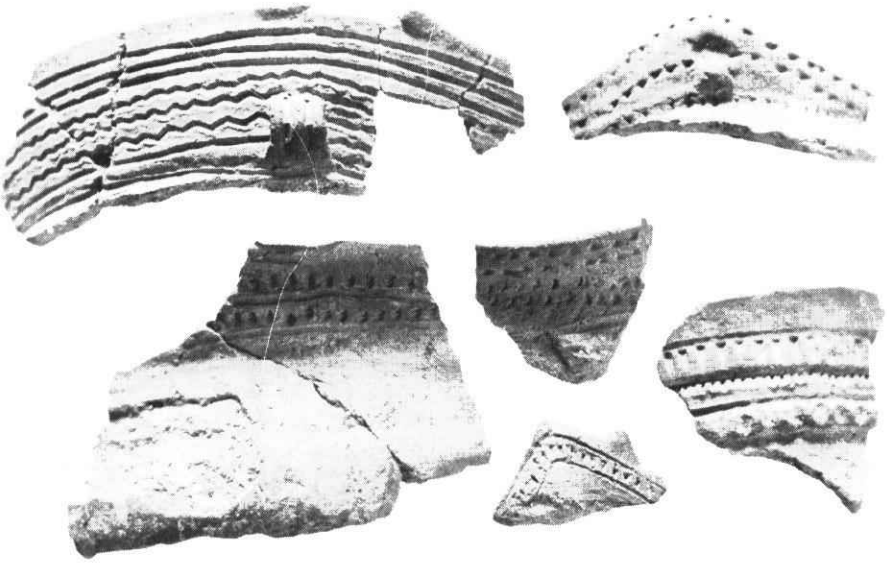
2



3

貝層出土の土器片

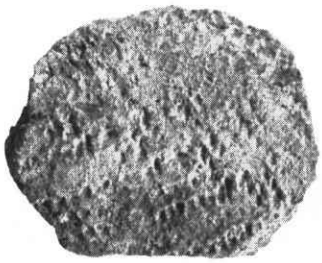
1．b下混土（×¾），2．貝層b（×½）
3．a－b間層（×⅓）



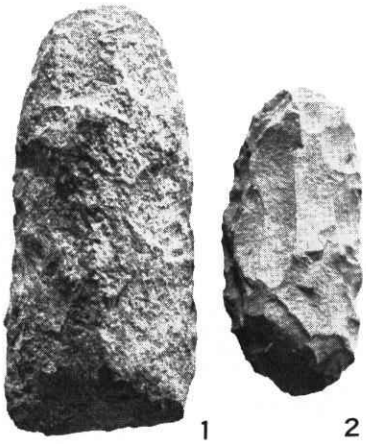
1

2

4



3



1 2

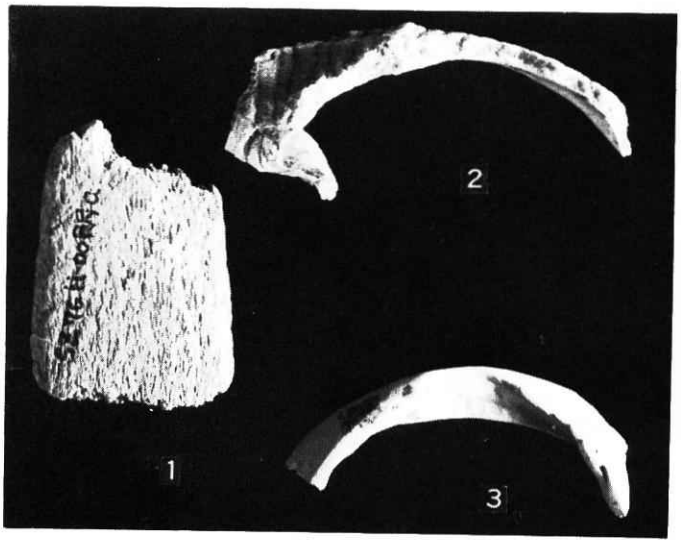
貝層出土の遺物

1．貝層a（⅓）、2．a－b間層上面（⅓）

3．土器片錘（⅔），4．1打製丸ノミ，2．サイドスノレイパー（ともに×⅔）

1

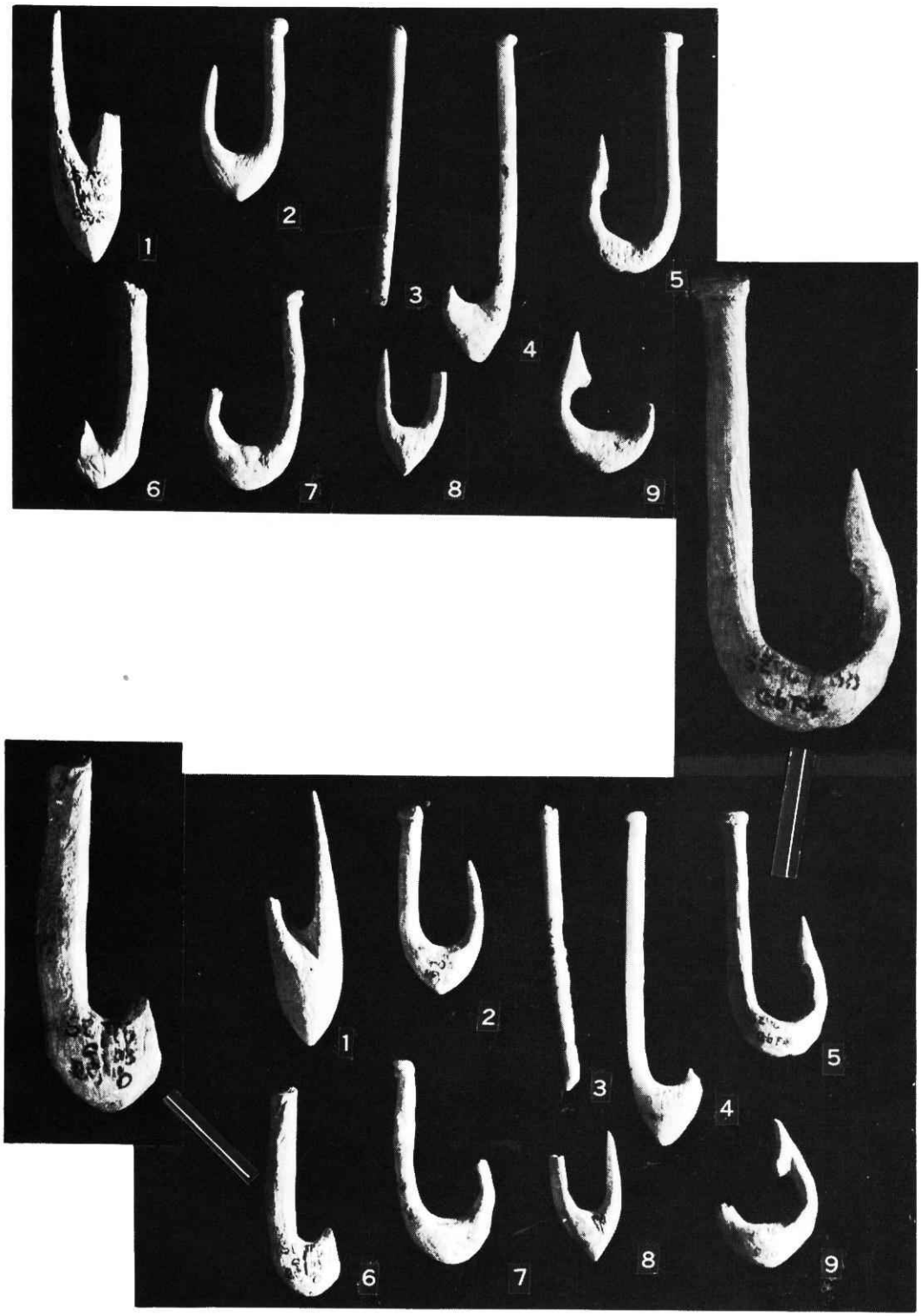
2



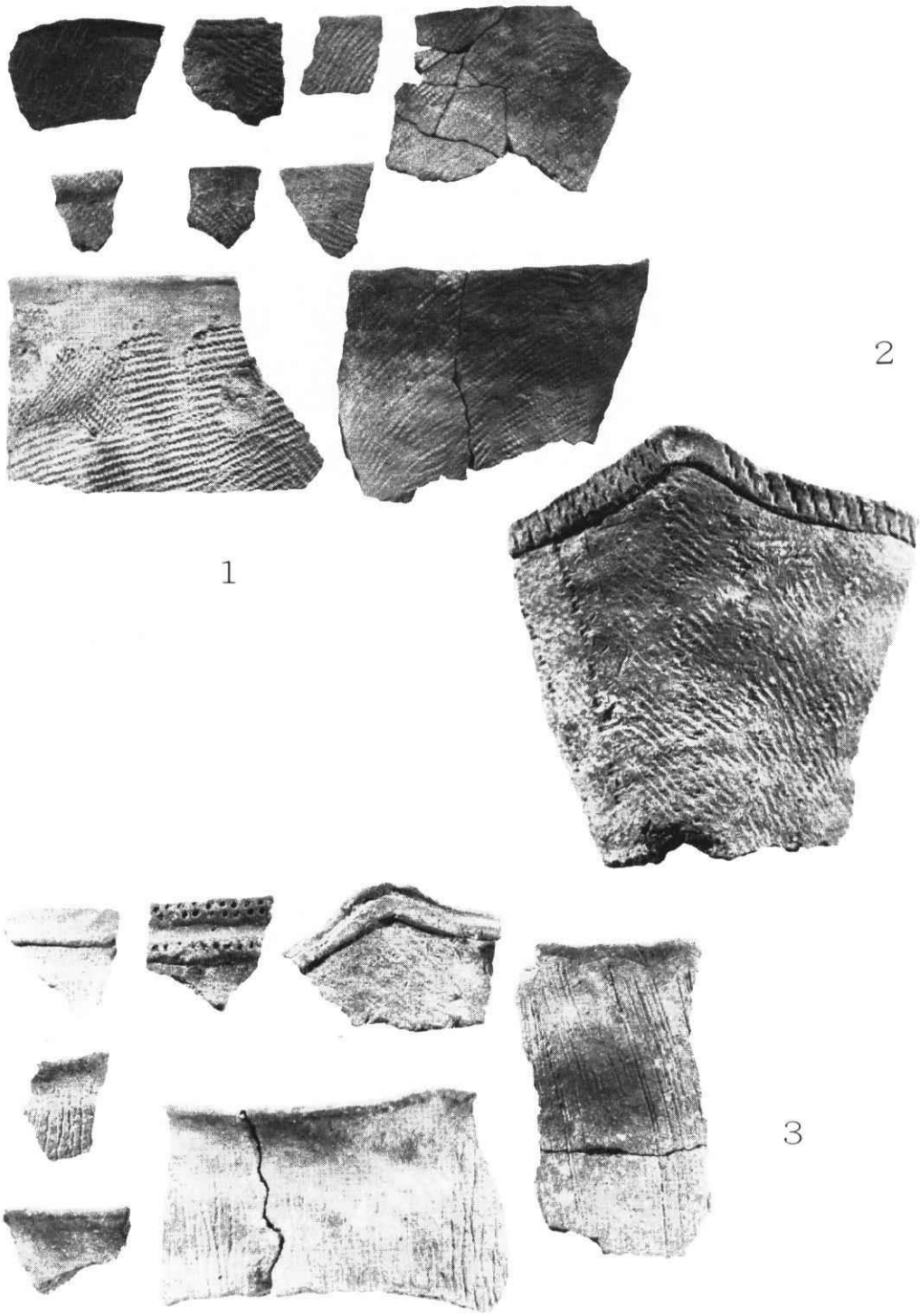
3

貝層出土の遺物

1．Ⅱa型深鉢（貝層a，×2/5），2．1篦状骨製品2．3貝輪（ともに×3/4）
3．鹿角製品（×2）



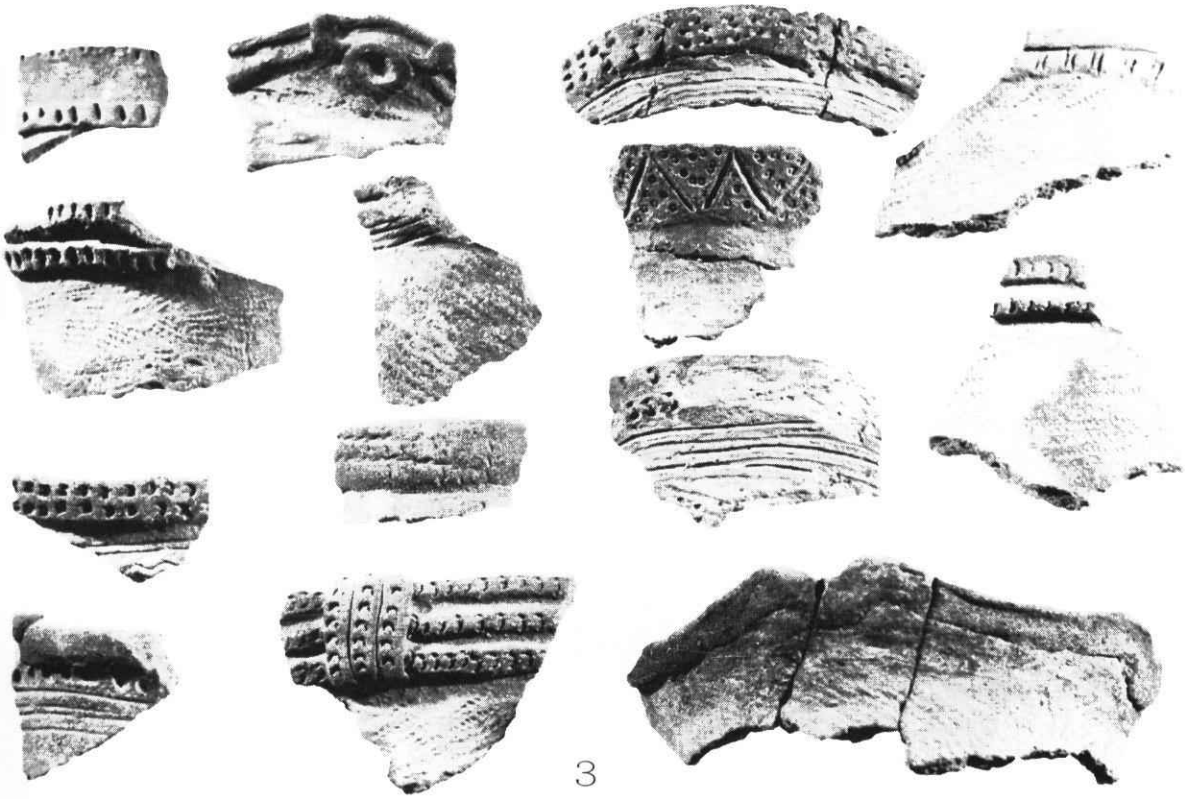
貝塚出土の釣針（×⅔）およびその拡大（×２）



南斜面出土の土器（1．2、深鉢Ⅰa，3．深鉢Ⅰb）

1

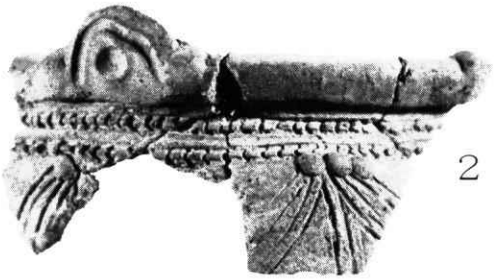
2



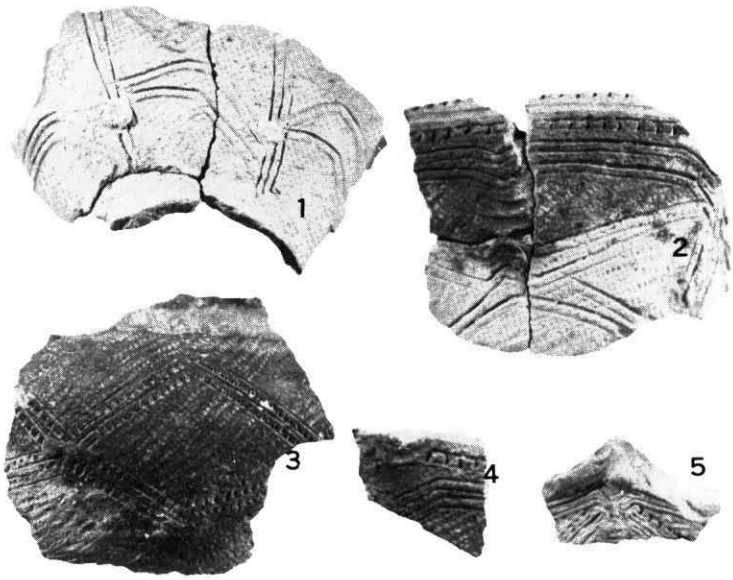
3

南斜面出土の土器（1．深鉢Ⅱa，2・3 深鉢Ⅱb）

南斜面出土の土器（1～3深鉢Ⅲa，4．深鉢Ⅲc）



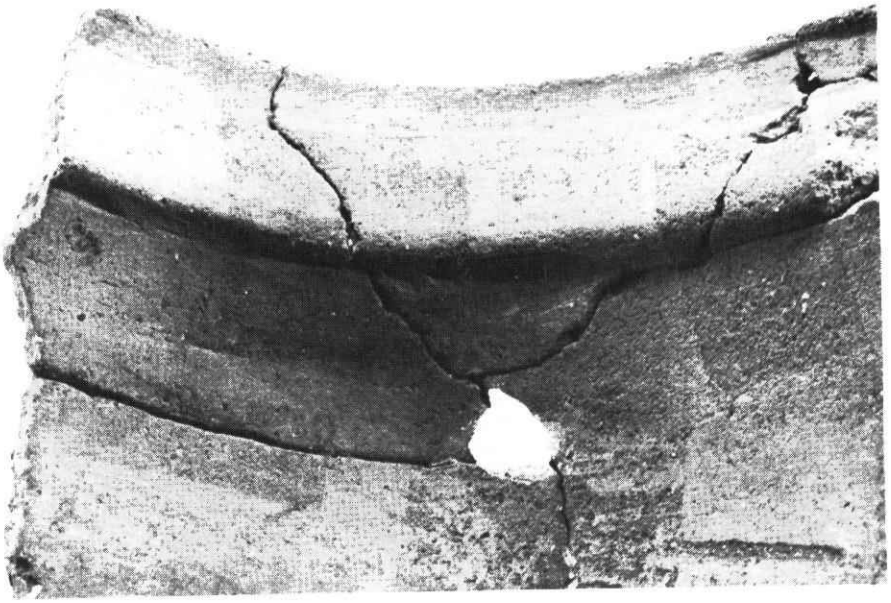
3



南斜面出土の土器（1．深鉢Ⅵ，2．および3－4・5鉢，3－1～3体部装飾意匠）

1

2



3

南斜面出土土器の成形技法
1・2底部周辺，3．深鉢Ⅲaの粘土帯積上げ）

序

岩手県の最南端に位置する大船渡湾をひかえる南三陸地域は、全国でも有数の貝塚群の所在地としてふるくから有名であります。

清水貝塚は、国の史跡として指定されている蛸ノ浦貝塚、県指定史跡である大洞・長谷堂両貝塚等にくらべれば小規模なものでありますが、昭和31年、早稲田大学考古学研究室による西斜面および南斜面部の調査が実施されて、人骨１本をふくむ多量の遺物を得るなど、貴重な成果をあげられております。その後、日時の経過とともに残余の部分が崩壊し、堙滅する恐れがあるため、岩手県教育委員会が記録保存をはかる目的で、国庫補助金を受けて発掘調査を実施したものであります。

短期間の調査ではありましたが、縄文時代の漁業の実態、ならびに本遺跡の性格を把握する手がかりをえることができました。ここに埋蔵文化財の価値を理解し、文化財保護を推進する一助ともなることを念じ、また研究者の方々の参考資料として調査結果の概要を刊行する次第であります。

末尾ではありますが、調査にあたってご協力、ご指導いただいた各位にたいし、心から感謝申し上げるとともに刊行の言葉とする次第であります。

昭和51年３月30日

岩手県教育委員会教育長　畑　山　新　信

Ⅰ はじめに

本貝塚は1952年、江坂輩弥・東登等による発掘調査が実施され（江坂・東1956)、その後1955年に西村正衛・菊池義次・金子浩昌によって発掘調査がおこなわれている。(西村・菊池・金子　1958)これらの調査の際、貝層の中心部は県道盛―綾里線によって破壊され貝層の一部が残存しているにすぎないとされていた。

1973年1月、岩手県教育委員会が国庫補助をうけて三陸沿岸地域の遺跡分布調査を実施した際、林は清水貝塚に立ちよったが、その際、同行した松尾吉高が崖寄りの部分から大木6式の大破片を採集し、崖面に比較的良好な貝層が露出している状態が観察された。その後、貝層が自然崩壊する状態などを目撃したため、貝層の残存部を調査し、記録にとどめる必要を感じ、1975年度、文化庁より埋蔵文化財緊急調査補助金の交附をうけて岩手県教育委員会が主体者となって調査を実施することとなったものである。遺物整理・報告書作成にあたっては、東北大学大学院生佐久間豊、明治大学学生福士広志・中村良幸の三氏の尽力をえた。あわせて謝意を表する次第である。

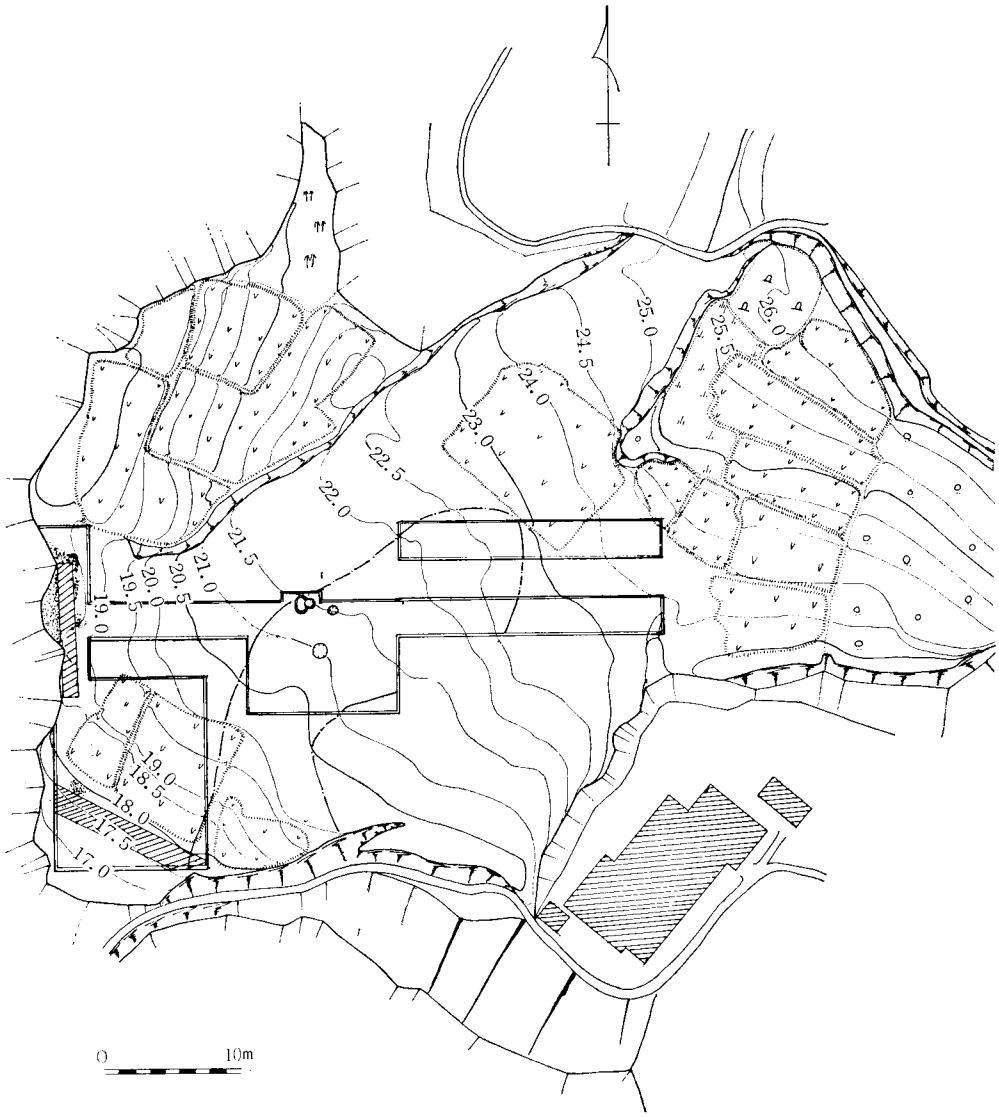
調査に際し、早稲田大学講師・金子浩昌、東京大学大学院・鶴丸俊明、青山学院大学大学院・江上幹幸、駒沢大学文学部村田良介の諸氏には、発掘調査に参加し、指導・協力をいただいた。また、大船渡市教育委員会社会教育課長・鈴木巌氏には作業員の斡旋、器材調達等にご協力いただいた。現地での発掘調査にあたり、格別のご協力をいただいた地権者・志田直、志田長四郎両氏、作業員としてわれわれと労をともにされた金野君太郎氏をはじめとする地元の方々ともに感謝の意を表する次第である。

なお、県教育委員会からの参加者は林謙作・坂川進・渋屋英保の3名であり、調査期間は1976年2月2日から2月14日までである。報告書執筆には、林があたった。

Ⅱ 調査の目的

今次の調査の目的は前節にも記したように、自然に崩壊する貝層の残存部を調査し、記録をとどめることと従来の調査で対象外とされていた緩斜面および平坦面上の遺構の有無を確認し、集落としての構造をあきらかにすることにあった。

当初、貝層の残存する崖面の調査をも実施する予定であったが、安全措置をとることが困難であるため、調査に危険のない部分にかぎることとし、志田実・志田長四郎両氏の所有地の崖寄りの畑地と草地の表土を剝ぎとり、貝層残存部の検出をおこなった。その結果、台地西側の県道沿いの崖寄りに、貝層の一部分を検出した。さらに西南の斜面からは地表下20cmほどの深さで、完形品をもむくむ土器片が多量に散布しているのが検出された。



Ⅱ—1図　清水貝塚平面図　Topographic Map of *Shizu Shell Mound*

そこで南側の道路と東側の崖の交点を基点とする3 m単位のメッシュを組み、南北方向にA，B，……東西方向を0，3，6……とし、個々のグリッドの名称は南西隅の座標をあてることとした。

ちなみに、貝層の残存部が検出されたのはG-00、G-03、I-00、I-03の四グリッドにまたがるが、I-00の大部分は削りとられており、またI-03の東半部はオーバーハングしていて危険なため調査に着手できなかった。

また、南斜面の土器の散布範囲（以下南斜面土器群と呼ぶ）は、C-03～C-15、D-03～D-15、E-03～E-15のほぼ9×12 mの範囲であった。

次いで、G列を巾3m東西33m（G-03～G-33）にわたって、表土を除去したところ、G-18～G-24にわたって巾9mほどの落ちこみ（以下、平坦面落ちこみと呼ぶ）が検出された。そこでE-18～E-33、I-18～33の表土を除去するとともに、F-18、E-21、E-24の表土をも除去し、岩盤まで全面的に掘りさげた。

Ⅲ　調査の方法と結果

1．平坦面落ちこみ部

G-06～G-15においては、表土を除去するとただちに基盤を構成する粘板岩が露出し、またG-27より東の部分でも同様であり、遺物もまったく出土しなかった。ただし落ちこみの外縁にあたる部分で、F-15・G-15-1・G-15-2・AG-18のピットが計4基検出された。

〔層序と遺物の出土状態〕

土層断面は、Ⅰ**作土**・Ⅱ**粘土質壌土**・Ⅲ**基盤の風化物**に大別される。以下、各の特徴を概述すると

Ⅰ．灰黄色(2.5Y7/2)シルト質壌土を基質とし、長径3.5cm前後の粘板岩片(angular～subangular)を多くふくむ。粘性にとぼしく、草根でようやく安定している。厚さ13～25cm。

Ⅱ．黒褐色～褐色（10YR2/2～10YR2/3）を呈し、色調・硬さにより、三帯に区分され、暗（硬）—明（軟）—暗（硬）のパターンを構成している。ただし、後世の耕作、植生、地中生物等の影響がつよく、整然たるゾーン構成は見られない。三者のうち、第一のゾーンがもっとも発達する。厚さ0～42cm。

Ⅲ．オリーブ褐色（2.5Y4/3）を呈するが、落ちこみ周辺部では褐色～赤褐色を呈する。厚さも周辺部で厚く、中央部でうすい。厚さ3～18cm。

遺物の包含状態をみるとⅠおよびⅢにはほとんどふくまれず、Ⅱに集中しているが、Ⅱの各ゾーンでは出土量・年代の顕著な差は見られない。出土状態を観察しても、斜位・直立の位置をとるものが多い“層中の分布”をしめしているので、長期間にわたり、浅い沢に流れこんだものと推定される。

第Ⅱ層中に岩塊・玉石等が散在し、焼土ブロックも検出されたので、住居址等の遺構の検出につとめたが、明瞭な輪廓をとらえることはできなかったし、焼土ブロックもその場で焚火のおこなわれた痕迹ではなく、灰・焼土を棄てたものと判断されるもののみであった。

〔遺物〕

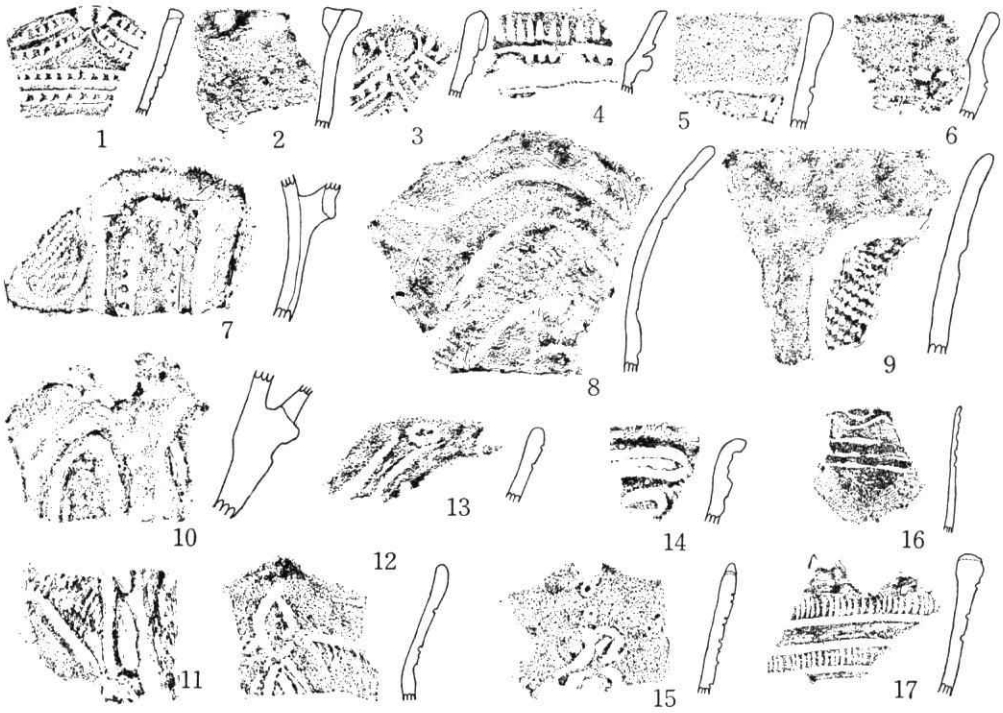
出土遺物は、土器片が大部分をしめ、石鏃未成品4点、敲石（？）3点、剥片若干のほか、土偶破片1点が出土している。

a. 土　　器

土器は、さきに述べたように、明瞭な層位関係をたもって出土してはおらず、弥生以降の遺物が相対的に上位から出土していると言いうるにすぎない。完形、ないし器形の復原できるものはない。主体となるのは、大木９式前半のものと、いわゆる門前式（吉田　1957、及川・遠藤　1975）であるが、典型的な大木10式の特徴をしめすものは見られない。ただ１点比較的大形の破片が見られるが、これはむしろ称名寺式に近い特徴をしめしている。大木９期以前のものとしてはＡＧ18～21の落ちこみ西側のピット周辺から大木７ａ式の破片が出土している。いわゆる門前期以降の土器としては、堀之内Ⅰ併行のものが、やや多量に出土しており、また後期末、晩期初頭の土器片も数片見られる（Ⅲ-1-1図）。

注目すべきことは、小破片ながら、弥生式土器と土師器・須恵器の破片がややまとまって出土しているので、その主要なものを図示するとともに、その特徴を表示する。（Ⅲ－１－２・３図、Ⅲ－１－１・２表）なお、珠洲焼と推定される甕の破片が１点出土している。

弥生式土器は谷起島式（鳥畑　1959）に類するものと（Ⅲ－１－２図、１～４）、秋田・宇津台（須藤　1970）[註]に類するもの（Ⅲ－１－２図、５～10）天王山式（坪井　1953）の範疇におさまるものの（Ⅲ－１－２図、11～20）三者に大別できる。



Ⅲ－１－１図　平坦面落ちこみの土器　Jomon potsherds from central dip.

（１：木大３　２：大木５　３：大木６　４：大木７ｂ　５～７：大木９新　８・９：称名寺系？
10～12：門前）大木10）　13～15：堀之内Ⅰ併行　16・17～晩期初頭）

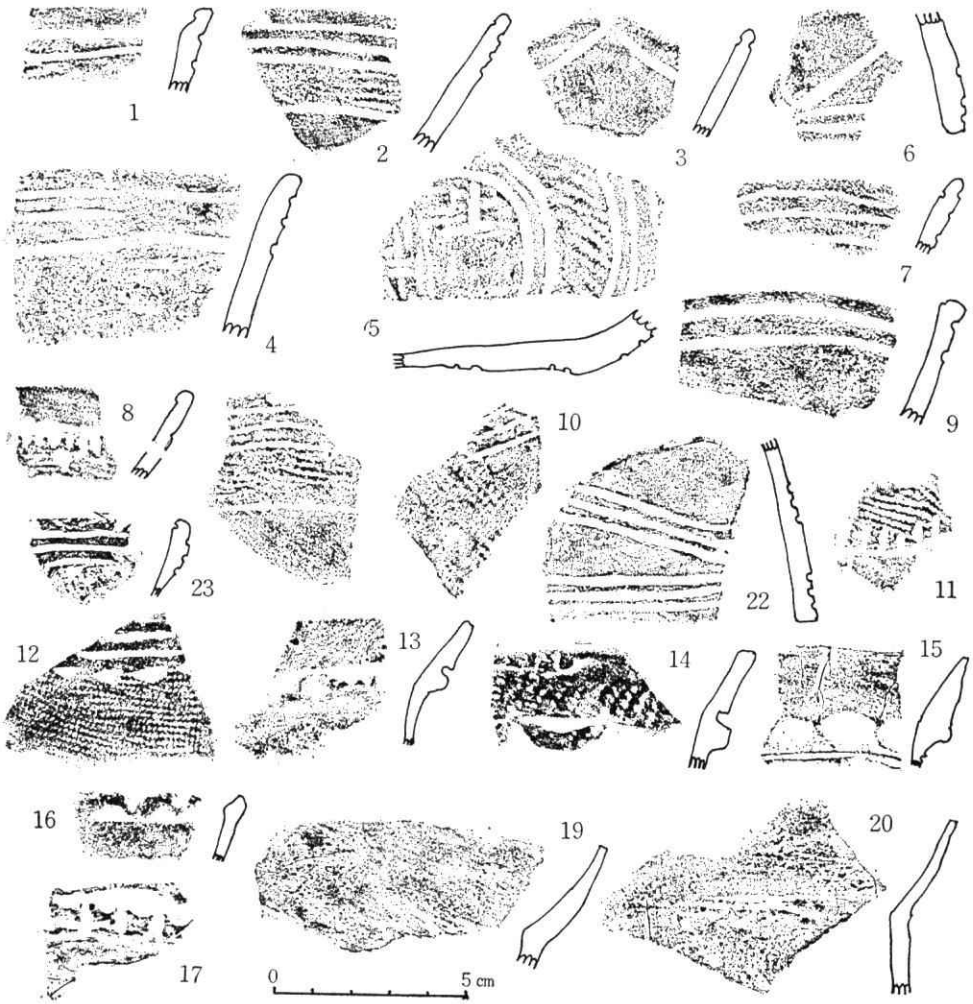
土師器は大別して8世紀末に属するものと、それ以降（9世紀後半～10世紀）のものにわかれるが宮城県地方の塩釜期前後に比定しうると思われるものの破片も見られる。

b．石　　器

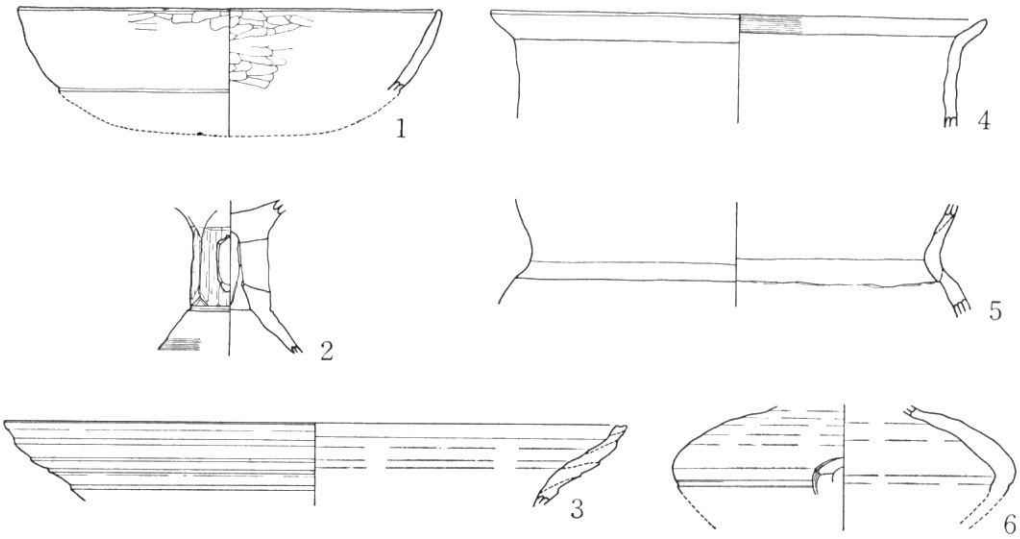
敲石（？）は、平面形長楕円形、断面長台形の玉石をそのまま利用したもので、側縁・台形断面の底辺にあたる部分に摩耗が見られ、左右いづれかの端部は激しい折撃によって破損している。また台形断面の上辺にあたる部分に、敲打の痕が顕著に見られる。（図版Ⅰ－2）。

石鏃未成品はチャートを素材とするもの2点、赤色石英1、頁岩1である。

剝片の岩質を検討してみると、チャートが36点中21点で約60％をしめ、のこりは頁岩（約25％）、硅質粘板岩（約10％）がほぼ同じ比率をしめる。なお、玉髓・流紋岩が1点づつ見られる。チャート



Ⅲ－1－2図　中央落ちこみ出土の弥生式土器　Yayoi potsherds from central dip.



Ⅲ-1-3図　平坦面落ちこみ出土の土師器、須恵器　Potsherds of historic period from central dip.

土器実測図　1 坏(H—6)　2 高坏(H—11)　3 長胴甕(H—20)　4 甕(H—19)
5 壺(H—12)　6 **甕**(S—1)

Ⅲ-1-2表　平坦面落ちこみ出土弥生式土器

挿図番号	器　種	時　期	調　　整・縄　文　等	胎　　土
Ⅲ-1-1	椀?	1	横ヘラミガキ?	砂　　粒
2	高杯?	〃	横ヘラミガキ?　LR↘(短い原体)	〃
3	〃	2?	〃	〃
4	鉢?	1?	口唇指ナデ	石英・長石粒多
5	〃	1	調整不明(内面ナデ—ミガキ?)LR→、丹彩	長石?・細　粒
6	高杯脚	1	ヘラミガキ	白　色　小　粒
7	?	1?		砂　粒　多　し
8	蓋	2?	口縁端横ヘラミガキ、内面ミガキ(方向不明)	混　和　物　少　し
9	高　杯	1		白色小粒・雲母
10	鉢	2	糸軸撚糸、廻転方向斜	長　　石
11	壺	2	RL↙	石英・砂粒　多
12	〃	1?	LR↘、内面ナデ	長　石・雲　母
13	広口壺	3	口縁部に異条斜行縄文	礫・長石粒多
14	〃	3	内面横ナデ、口縁にLR→	長　石　細　粒
15	〃	土師?	口縁下端に指頭圧痕	長　　石
16	鉢?	3	丹彩	白　色　小　粒
17	?	3	指ナデ(横?)	長　　石
18	?	3?	内面にベニガラ痕跡、糸軸撚糸	砂　　粒　　多
19	甕	3?	口縁斜ヘラケズリ、肩部タテナデ、内面横ナデ	礫・砂　粒　多
20	〃	3?	口縁〜肩斜ナデ、内面横ナデ	礫　　多
21	〃	3?	横ナデ、頸部ミガキ、内面横ナデ	礫　　多
22	高杯脚	1	表面斜ヘラケズリ→横ヘラミガキ、内面斜ケズリ→タテミガキ	砂　粒・雲　母
23	?	?	内面斜ヘラミガキ	砂　　粒　　多

Ⅲ-1-2表　中央落ちこみ出土の歴史時代土器

番号		器　種	調　　整	胎　　土
H-1	土　師	坏（丸底）	外面ヘラケズリ→ヘラミガキ；内面ヘラミガキ、黒色処理	砂粒若干ふくむ（普）
2	〃	〃（〃）	外面手持ヘ〃ラケズリ；内面ヘラミガキ	礫をふくむ（粗）
3	〃	〃（〃）	外面にヘラ彫？による段；内面ヘラミガキ	〃（〃）
4	〃	〃（〃）	外面ヘラミガキ；内面不明；内外面黒色処理	（細）
5	〃	〃（〃）	〃　；　〃	砂粒若干ふくむ（普）
6	〃	〃（内高）	外面横ヘラミガキ；内面ヘラミガキ、黒色処理	〃（〃）
7	〃	〃（外反）	外面ヘラミガキ；内面ヘラミガキ、黒色処理	（細）
8	〃	〃（平底？）	〃　；　〃	（〃）
9	〃	〃（椀形）	〃　；　〃	礫をふくむ（粗）
10	〃	〃（外面に稜）	外面上半横ナデ；内面ヘラミガキ、黒色処理	砂粒を多くふくむ（〃）
11	〃	高　杯	坏部黒色処理；脚ヘラによる透しつき	砂粒若干ふくむ（普）
12	〃	壺	肩に不明瞭な段をもつ；調整不明	砂粒多くふくむ（粗）
13	〃	〃	外面に縦位ハケ目、丹彩；内面不明	長石粒やや多し（細）
14	〃	カ　メ	？	雲母を多くふくむ（細）
15	〃	〃	外面不明、内面横位ハケ目	礫を多くふくむ（粗）
16	〃	〃	口縁外反し、口縁端でやや立ちあがる、調整不明	砂粒を多くふくむ（粗）
17	〃	〃	口縁外反し、端部でとくに強くなる、内外横ナデ	雲母細粒をふくむ（細）
18	〃	〃	口縁弧状に外反、調整不明	〃（〃）
19	〃	〃	口縁短く、強く外折、口頸内面横ナデ	雲母・砂粒をふくむ（粗）
20	〃（擦文？）	長胴カメ	外面にロクロ成形による段；ロクロナデ	砂粒多くふくむ（〃）
21	〃	〃	外面ロクロナデ；内面不明	雲母をふくむ（普）
22	〃	〃	〃　；　〃	〃（〃）
23	〃	〃	外面縦位ハケメ；内面横方向ハケメ	礫多くふくむ（細）
S-1	須　恵	ハ　ソ　ウ	注口穿孔は外→内；ロクロナデ	（粗）
2	〃	カ　メ	外面平行タタキ目；内面青海波文	砂粒かなり多い（普）
3	〃	〃	〃　；　〃	〃（〃）
M-1	珠　洲　焼	〃	口唇外折（水平）；ロクロナデ；器面凹凸	〃（〃）

Ⅲ-1-3　平坦面落ちこみ出土の敲石

出土地点	層　位	長　径	短　径	厚	重　量	材　質
I 03	a-b間層	120.4	68.7	28.9	420	安山岩
F 24	bゾーン	154.7	66.3	38.8	600	〃
〃	〃	124.5	50.1	35.3	420	砂　岩
〃	〃	148.0	72.8	37.7	630	安山岩

・頁岩ともに、色調・夾雑物等から見て4～6種類にわかれ、乏しい原料を少量づつ入手していた印象をうける。

c．土偶（図版Ⅰ－1）

横断面平凸レンズ状を呈し、表面と裏面および右側面に3～4条を単位とする撚糸文（R）が施文されている。胎土には長石その他砂礫をやや多量にふくんでいる。破口には成形時の粘土ブロックの“す”が見えるが、成形方法は不明である。全体が長楕円ないし倒卵形をなす体部に水平に突出する腕を表現した、いわゆる十字架土偶の末端部と推定される。

〔遺構〕

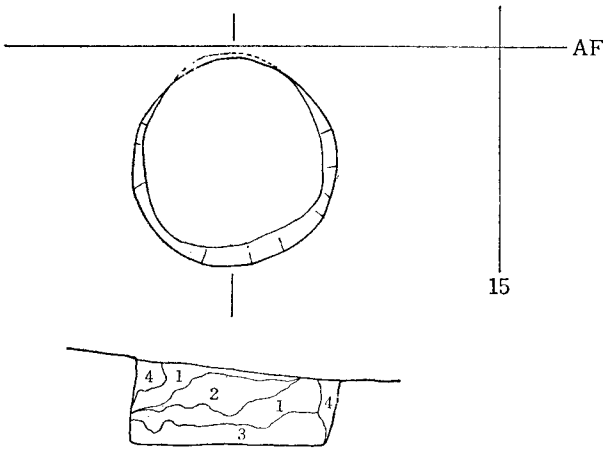
F15ピット（Ⅲ－1－4図）

下底部の長径1.2m、短径1.0mのほぼ円形を呈する。断面積は台形を呈し、上面の径は1.0mほどである。基盤に掘りこんでおり、掘りこみの深さは北側で約0.5m、南側で0.35mほどである。埋土の断面を見ると、埋土のブロックは南から北にむかって傾斜しており、この傾斜が自然のそれと逆であることから、人為的に投げこまれたものと判断される。基本的な層序は、底面に接して褐色（10YR 4/4）の相対的に軟質の壌土層がほぼ水平に堆積しており、その上ににぶい黄褐色～黄褐色（10YR 4/8～5/8）の岩片をふくむ粘土質壌土があり、さらにその上位に褐色（10YR 3/4～4/4）の砂礫を多くふくむ粘土質壌土がレンズ状に乗っている。堀方の周壁に接する部分には、基盤の風化物が堆積している。

埋土下部のほとんど底面に接する部分から出土した土器片はすべて大木9期後半のものである。

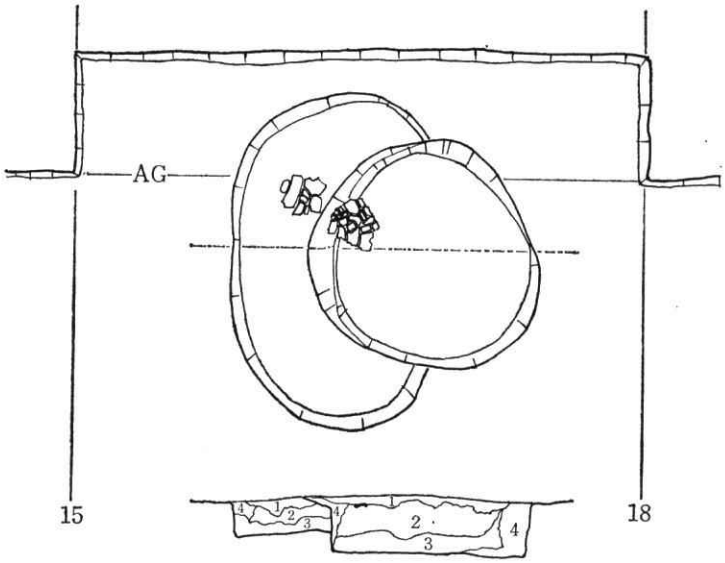
Ⅲ－1－4図

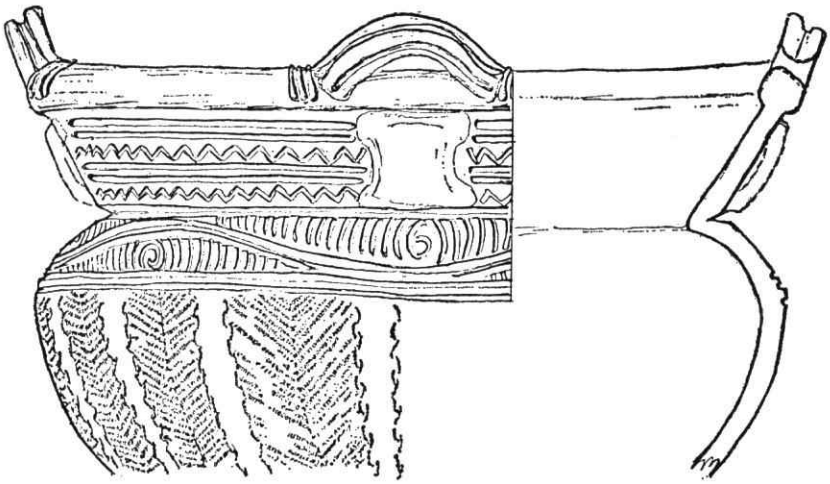
1　砂礫をふくむ粘土質壌土
2　岩片をふくむ粘土質壌土
3　軟質の壌土
4　基盤の風化物



Ⅲ－1－5図

1　砂礫をふくむ粘土質壌土
2　岩片をふくむ粘土質壌土
3　軟質の壌土
4　基盤の風化物





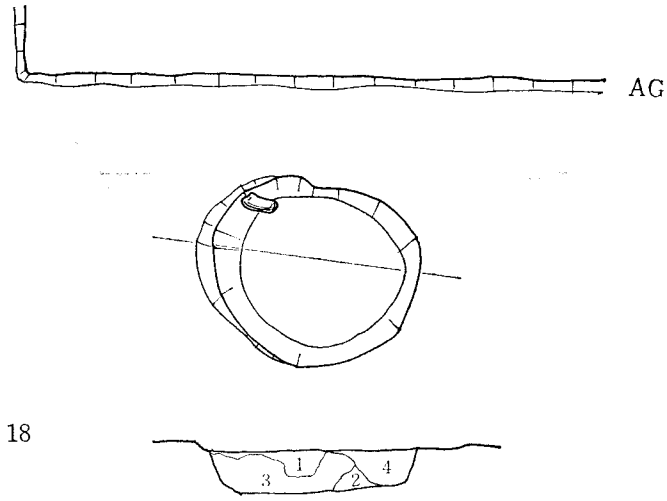
Ⅲ－1－6図　AG15－1 ピット出土土器　Pottery From Pit AG15-1

AG15-1ピット（Ⅲ－1－5・Ⅲ－1－6図）

AG15-2ピットによって切られている。埋土は基本的に水平に堆積しており、AF15ピットのように、岩片混入量の異なる小ブロックはみとめられない。底部近くに相対的に軟質の壌土が堆積し、その上に砂礫を多くふくむレンズ状ブロックが乗ることはおなじである。大木76期の深鉢の大破片が1個体分（Ⅲ－1－6図）埋土2の上面から出土している。

AG15-2ピット（Ⅲ－1－5図）

AG15-1ピットを切って堀りこんでいる。埋土の層序はAG15-1よりもさらに単純であり、東半の壁周辺に、基盤の風化物のブロックが認められるほか、AG15と基本的に一致する。砂礫を比較的多



Ⅲ－1－7図
1　砂礫をふくむ粘土質壌土
2　岩片をふくむ粘土質壌土
3　軟質の壌土
4　基盤の風化物

量にふくむブロックの上面から大木7ａ式土器の大破片が1個体分横倒しの状態で検出された。

ＡＧ18ピット（Ⅲ－1－6）

西側に肩がつくこと、東側の風化物の堆積状態などから見て、他のピットが切り合つている可能性もあるが、確認できなかった。

〔註〕宇津台例とは装飾モティーフの構成が基本的に一致するというだけで、沈線の太さ縄文原体の撚り等から見れば、岩手、煙山（伊東　1964：fig.　　）等の例に類似する。

2．貝　　層

〔調査方法〕

はじめに述べたとおり、表土を除去して貝層を露出させ、さらに1958年の西村らの調査の際に設定したトレンチの埋土を排除したのち、調査に着手した。

貝層直上の土層をもふくみ、すべての上ゲ土を目のひらき10㎜の篩でふるい、貝殻・岩片・樹根等以外のものはすべて採集し、さらにその残土を目のひらき5㎜の篩でふるって、篩に残った物体はすべて袋詰にして持帰った。

また、G-03と、H-03の境界に露出した貝層ブロック、ならびにG-00とH-00の境界の壁を利用して、30㎝四方のブロックを設定し、層序にもとづいてサンプルを採集した。また、Ｉ-03の灰混り混貝土層をも30×30×5㎝のブロックで採取した。層序別のサンプルの容積は次のとおりである。

サンプル	1．G-03 貝層（貝層ｂ）		12,000cc.
〃	2．G-03 貝層下土層		2,500cc.
〃	3．G-00 貝層（貝層ａ）	上半部	2,025cc.

サンプル	4.	G-00	貝層（貝層a）	下半部	3,825cc.
〃	5.	〃	混貝土層（貝層a・b間層）	上半部	5,850cc.
〃	6.	〃	〃	下半部	8,775cc.
〃	7.	〃	貝層（貝層b）	上半部	5,400cc.
〃	8.	〃	〃	下半部	10,125cc.
〃	9.	〃	貝層下土層		4,275cc.
〃	10.	I-03	灰混り混貝土層（貝層c）		4,500cc.

なお、報文中で記載・考察の対象としているのは、発掘作業に際して採集され遺物、ひらき10mmの篩で回収された遺物、およびブロック・サンプル中にふくまれた遺物の一部に限っており、ひらき5mmの篩によって回収された遺物は、処理が完了していないので割愛した。

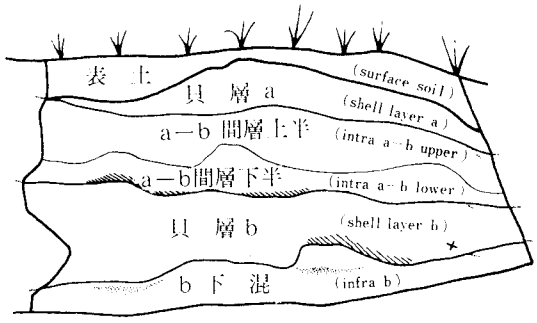
〔層序〕

東から西にむかって降る斜面にあり、現在の地表面は約7％の勾配をしめすが、貝層形成当時の勾配はそれよりもやや強かったようで約10～15％と推定される。

貝層の輪廓がどのような形状をしめしたのか現在では推定が困難である。いづれにしても現在道路沿いの崖面では厚さ30～45cmの貝層が観察され、今回調査した範囲にはこれに匹敵する厚さの貝層が見られないことから判断しても、県道・綾里―大船渡線の開通時に貝層の主体部は破壊されたのであろう。貝層の断面はⅢ-2-1図のとおりである。

表土は淡褐色のシルト質壌土で、きわめて粗しようであり、構造はほとんど認められない。基盤に由来する角礫をかなり多量にふくむ。厚さ10～15cm。

貝層a　上半部は腐植が沈着し貝殻も黒く汚れ、破砕をうけていて、壌土がかなり混っているが、下半部では褐色を呈し、灰が基質であり魚骨片・マグロのウロコ等をふくむ。貝層を構成する貝は、アサリを主体とするが、スガイ、コシダカガンガラ等の腹足類がきわめて多い。詳細は動物遺体の項で述べる。G-00、H-00の一部、ともに旧トレンチ西側と崖の間、さらにI-03の一部に検出された。厚さ0～9cm。



Ⅲ-2-1図　貝層断面図　Profile of shell heap.

a－b間層　褐色～赤褐色を呈し、マグロの鱗、小形魚の骨等を多量にふくむ灰を基質とする混貝層。灰を基質としており、土壌の混入量はきわめて少いが、上半部で岩片が目立つ。魚骨の集積は下半部にとくに顕著であるが、上半部に少いのは貝層aが地表に露出していた間に魚骨が分解されたためかもしれない。厚さ9.5～23.5

cm。分布範囲は貝層aとおなじ。この層の上面に、マグロの椎骨が3～5個連接した状態で3ヶ所から検出された。

貝層b　灰を基質とし（ただし炭化物は多くない）土壌成分が少い点では≒間層とおなじであり、貝層aにくらべ、腹足数の比率がはるかにひくく、アサリが多い。ただし、場所によってはかなりのかたよりがあるらしく、G-03で採集したブロック中では腹足数が高い比率をしめしている。下面に近い部分ではイガイの砕片が目立つ。旧トレンチをはさみ、G-00、H-00、G-03、H-03、I-03の一部で検出されているが、G-03、H-03、I-03では下半部のイガイの多い部分はごく薄く、1cmに満たぬ厚さしかなかった。厚さ0～14.5cm。

b下混貝土層　茶褐色と呈し、a—b間層とおなじく、腐朽した魚骨を多くふくむ。またイガイの破片が、少量見られる。上面にマグロの椎体が連接した状態で発見されたことも、a—b間層とおなじである。

灰混り混貝土層（貝層c）　さきのb下混貝土層と同時異相と考えられる。灰褐色ないし灰緑褐色の岩片を多くふくむ風化壌土を基質とし、部分的に径20～30cmの灰、および貝のブロックがみとめられた。灰ブロックは白色～淡灰褐色で、焼灰に水をかけた後のようにスコリア状の核をもち、凝固していた。また貝のブロックはカキ・オオノガイが主でアサリはむしろ少量であったことが上位の両貝層と違っている。貝殻は風化が甚しく、ブロック・サンプルの採取および処理の際、充分注意したにもかかわらず、砕けてしまう程であった。厚さ0～7cmで、I-03区の一部、旧トレンチに接する部分にのみ検出された。

風化土壌層　淡赤褐色～淡褐色を呈し、岩片をきわめて多くふくむ。上位5cmほどまでは木炭片、土器片等が見られるが、土器はいづれも風化が甚しく、しかも細片となっている。場所によって異なるが、15～20cm前後で風化を受けぬ基盤（粘板岩）に達する。

以上の層序を西村等の記述（西村・菊池・金子　1958：Pl. 6～8、第3図）と比較してみると、A-Ⅱトレンチの層序と良く合致することが知られる。両貝層をはじめとする各層の状態はまったく矛盾しない。また後述するように、各層からの土器の出土状態も一致している。

〔出土遺物〕

a．土　　器

全体として少量であり、分類記述をおこなうに足りるほどの量がないので、概要をのべ、代表的な例を図示するにとどめておく。

貝層a　比較的量が多く、とくにH-00でまとまって出土している。口縁部によれば19個体が確認でき、体部破片によって代表される個体をも加えれば、65個体前後と算定される。南斜面出土の土器群のうち、深鉢Ⅳと特徴が一致するので、記述は省略する（図版Ⅲ-1、Ⅲ-3-11図3、Ⅲ-2-3図1～6）。

Ⅲ-2-2図　貝層出土土器（1～6：貝層a　7：a—b間層上面　8～15：a—b間層）

a—b貝層　土器の出土面は、間層上面、層序の項でのべた上半と下半の境界、さらに下面ちかくのイガイ破片の目立つ部分の上面にわかれる。

上面から出土した土器は、体部破片をもふくめ3個体であるが、装飾モティーフの表現技法、器表面の調整技法等の点で貝層aのものよりも大木6的な色彩がつよい（図版Ⅲ-2）。

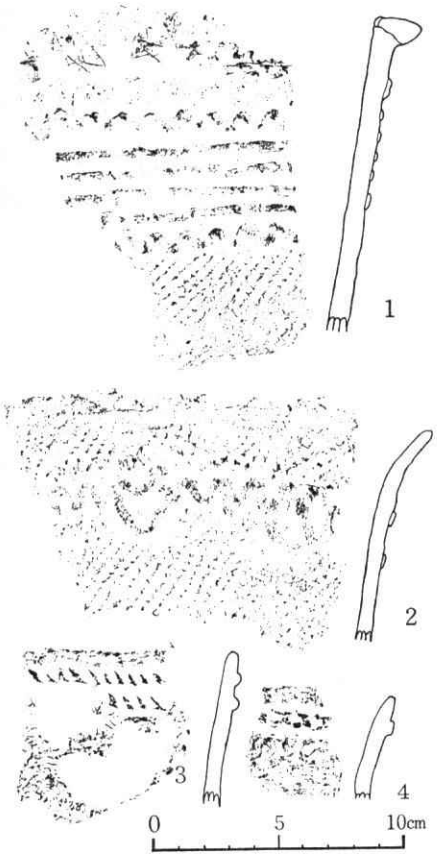
間層の上半と下半の境界面、および下底部から出土する土器は同一時期に属するものと考えられる。器形は口縁が単純に外開きする深鉢と、2個1対の大ぶりな波状口縁をもち、外開きないし外折する口縁部に、程度の差はあっても胴部にふくらみをもつ深鉢がある。なお、前者にも波状突起をもつものがある。前者は、装飾モティーフにとぼしいのにたいし、後者は装飾モティーフが盛行する。装飾モティーフは、竹ヒゴ状の施文具をもちいて、上下に走る稲妻状のモティーフを表現したものと、「父」字・X字状のモティーフを巾2.5～4.5㎜、厚さ2～3㎜の粘土紐をはりつけて表現したものがある。いづれの場合も、波状突起の直下を中心にモティーフが展開されている。底部の成形技法、粗大な編物圧痕等は南斜面・貝層a出土の土器群と共通する。ただ、両者に見られる内外面のヘラケズリ、さらにヘラミガキの技法は見られず、指ナデにとどまっている。胎土組成も両者に見られるように混和物の特に多い例は見られぬかわり、全体として砂粒が多く、また焼締りもわるい。

地文はＬＲの斜位廻転が多いが、ＬＬＲが少数見られる。斜行撚糸文が多いが網目状撚糸文・木目状撚糸文・第2種結束をおこなった原体による縦位帯状縄文は見られない。Ⅰ-03に比較的出土量が多く口縁部で12個体、体部をふくめると48個体が確認されている（図版Ⅱ-3、Ⅲ-2-2図10～14）。これらの特徴は大木5式と一致するものである。

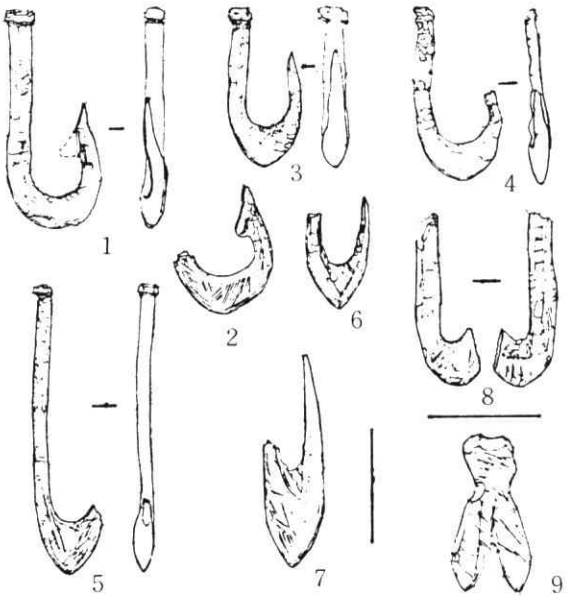
貝層b　口縁が外反し、胴部が一旦すぼまって、ふたたび底部にむかって外反するアサガオ形の深鉢、口縁がかるく外反し、最大径が胴部に位置する深鉢がある。装飾モティーフはa—b間層とおなじく、粘土紐の貼りつけによって表現されており、連続山形を数段組みあわせたものが見られる。粘土紐の貼りつけは口唇部にまで及んでおり、a—b間層に見られるように口唇に刻見を加えたものはない。器面調整、胎土粗成はa—b間層のものとほとんど同じであるが、焼成はさらに多孔質で軟質のものが多くなる。縄文原体の撚りも基本的にはa—b間層とおなじであるが、粗く硬い繊維をもちいて綾く撚ったものが目につく。H-03、G-00からややまとまって出土しており、個体数は口縁部3個体、総数20個体前後と算定される（図版Ⅱ-2、Ⅲ-2-3図1・2）。ほとんどの個体が大木4式としてとらえて差支えない。

貝層b下混貝土層　貝層a～貝層bまでのものにくらべ一段と薄手で、単純な深鉢形と推定される。口唇部に1～2条の粘土紐をはりつけ、半截竹管で刻目をつけている。地文は縄軸巻の撚糸文を地文としている。体部破片はヘラ削りの無文と、非繊維質の原体をもちいた横位綾絡文が多い。口縁部2個体、体部をもふくめると7個体前後と算定される（図版Ⅱ-1、Ⅲ-2-3図3・4）。Ⅰ-03から比較的まとまって出土している。大木Ⅱb式に比定される。

貝層c　型式判定可能な破片は出土していない。



Ⅲ－2－3図　貝層出土土器
（1、2：貝層b　3、4：b下混土）



Ⅲ－2－4図　貝塚出土釣針その他（2：貝層a
1、4、5～7：a—b間層　8、9：貝層b）

b．釣針（Ⅲ－2－3図、図版Ⅴ）

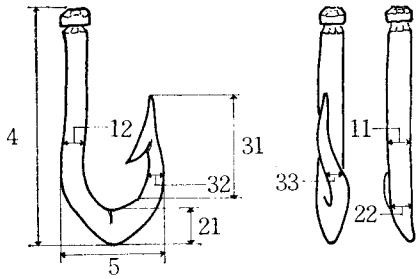
“あぐ”の無いものと（4点）内あぐの形態不明のもの（2点）があり、早大による調査の際、“あぐ”のないものばかりが出土したのと対照的である。最大巾と全長の比率が、20％台のもの（3点）と、40～50％台のもの（4点）がある。前者は“ふところ”の部分が肥大し、下方に尖っている。後者のなかにも“ふところ”が肥大する傾向は見られるが、前者ほどいちじるしくない。前者はすべて“あぐ”をつくり出していないが、“内あぐ”のつくり出しのある例は2例とも後者に属する。寸法その他詳細は表Ⅲ－2－1、計測部位についてはⅢ－2－5図を参照されたい。

素材はいづれも鹿角と推定される。仕上げの研磨は軸部には応用されておらず、面取り状に削ったのち、さらに削りをくわえたらしく、工具の刃こぼれによる条線がのこされている場合もある（図版Ⅴ拡大図）。“つぶし”の頂部を観察すると、すべて四周に刻みを入れたのち、折り取った痕迹がみられる。

上に記載したほかに、細長い輪廓をもつタイプの軸部の破片と思われるものが1例ある。

c．その他の労働用具（Ⅲ－2－4図）

貝層aから　玉石の原石面を残し、主剝離面のみに加工したサイドスクレイパー（頁岩製・68.2×31.9×13.6㎜・119㌘）凹基肉厚なつくりの石鏃（硅質頁岩製・28.6×19.3×5.5・2.3㌘）、縦形石匙



Ⅲ－2－5図　貝釣針計測部位模式図

（チャート製、63.0×16.2×5.5、6.7g）が各1点出土している。サイドスクレイパー、石斧はⅠ-03、石匙はG-03から出土した。a—b間層では、サイドスクレイパーとおなじく原礫面をとどめる剝片を素材とした打製丸ノミ（玢岩製・93.7×42.5×23.3・215g）、鹿角製ポイント破片（71.6×7.1×3.8・断面平凸レンズ状）棒状角器破片（37.6×7.0×6.6、断面カマボコ形）が出土している。すべてⅠ-03出土である。

d．装身具等（図版Ⅳ－2、3、Ⅲ－2－3図）

貝層aからは石剣称の石製品破片（216.0×22.8×12.2、粘板岩製）、クジラの肋骨を素材とする箆状骨製品破片（39.4×29.1×7.8）が各1点出土している。石剣様石製品は一端に揉錐による両面穿孔の痕迹があり、反対側の端の側縁に敲打の痕迹が見られる。磨き上げの際の擦痕は長軸と平行に走っており、斜め・直交するものは見られない。箆状骨製品の一方の側縁には切刻みの痕迹は見られるが、それ以外の場所には成形も仕上げ作業の痕迹は見られない。

貝層bから、貝製腕輪破片3点（G-03より2点、Ⅰ-03より1点）、鹿角製の異形品が1点出土している。

貝製腕輪は、ベンケイガイ、アカニシを素材とするもの各1、マガキかと推定されるもの1点（小破片のため確実でない）である。

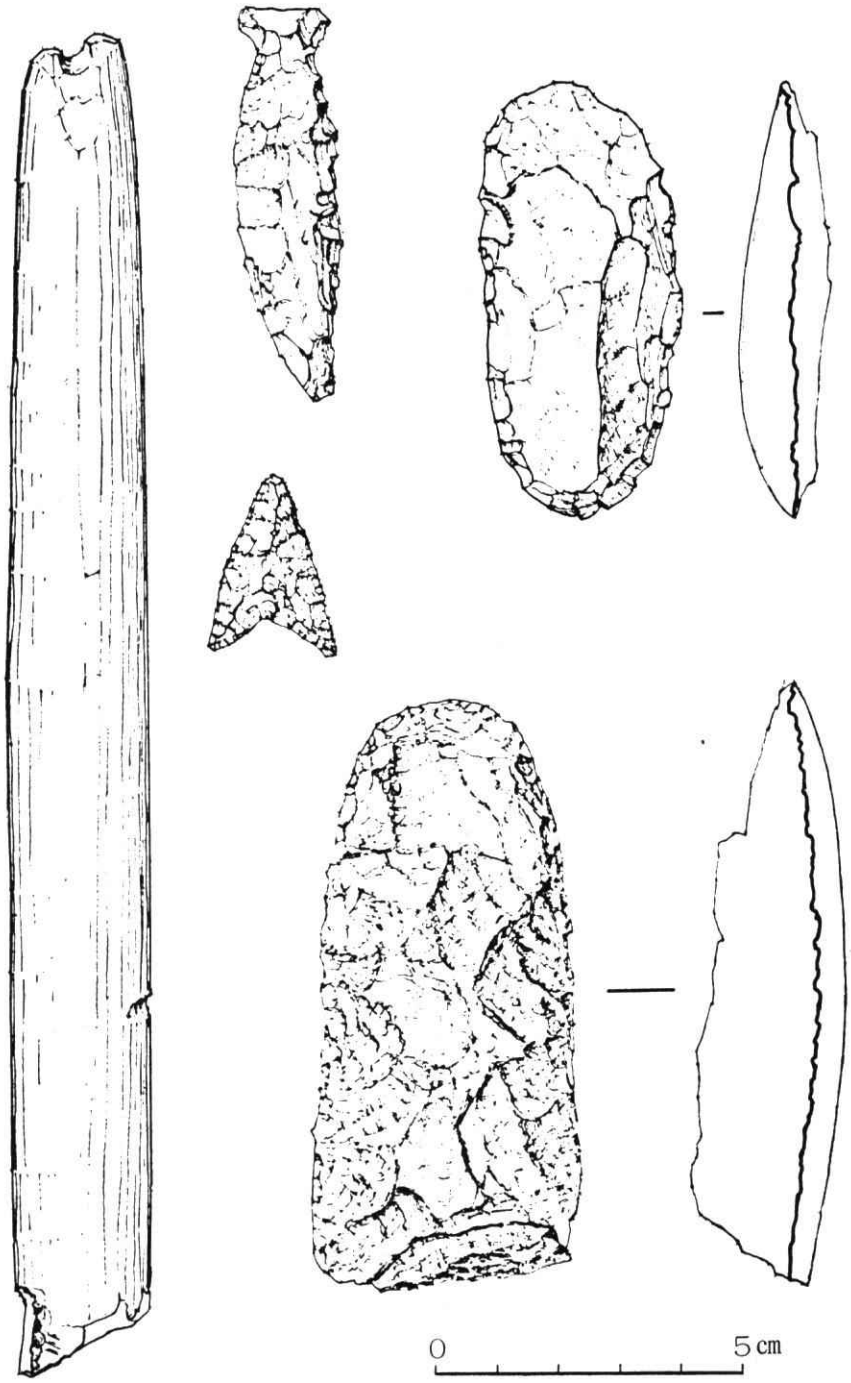
鹿角製品（29.2×14.4×3.6）は、表裏面、周縁をヤスリ状の工具でケズリ仕上げしており、擦痕が無数に見られる。一端に両面穿孔の孔の一部と、破損した破口が見られるが、ともに磨耗している。おそらくは、より大形の鹿角製品の破片に手をくわえたものであろう。

e．その他の遺物

各地区、各層位から汀線附近から運ばれたと考えられる玉石が出土している。その詳細は表Ⅲ－22のとおりであるが、そのうち、あきらかに磨石と判定できるのは、貝層aから出土した2点のみで

Ⅲ－2－1表　釣針各部計測値一覧表　Measuremet of the fishhooks.

層位	地区	1	あぐ	2	3	4	5	備考
		11×12		21×22	31×32×33			
貝層a	G—03		内	8.0×4.5	16.8×3.5×2.4		17.9?	軸欠
〃	〃	4.8×3.9	?	9.4×5.1				つぶし、針先欠
a—b下半	H—00	3.6×4.0	内	6.7×4.4	16.5×2.9×4.0	41.2	17.6	あぐ欠
〃	〃	2.8×3.1	無?	10.8×4.1		54.5		針先欠
〃	〃	(5.6×3.1)	無	19.4×8.2	21.4×4.3×2.4		11.4	軸欠
〃	Ⅰ—03	(3.6×2.1)	〃	9.2×4.4	11.8×2.4×2.0			軸上半欠
貝層b	G—00	(3.3×3.2)	〃	8.8×4.1	12.9×2.6×2.3	29.9	13.9	
〃	G—03	2.3×3.2	〃	8.4×3.8	(9.5)×2.4×2.3	32.5	16.2	針先尖端欠



Ⅲ－2－6図　貝層出土石器その他

ある。このなかには、石器原料として運ばれたものもふくまれているものと推定される。

貝層aからは、I-03において土器片利用の円盤状土製品（66.8×56.2×7.1、35.4g）が1点出土している。

Ⅲ-2-2表　貝層出土の玉石一覧　Measuremenf of the cobbles.

層　位	地　区	長　径	短　径	厚	重　量	材　質	備　考
貝層a	H—00	62.5	56.2	46.0	240	玢　岩	磨　石
〃	G—03	66.5	55.5	48.6	260	花崗岩	
〃	I—03	80.3	75.2	61.0	540	〃	磨　石
a—b間	〃	(115.3)	(115.0)	71.0	1,110	〃	
〃	〃	76.4	55.5	31.9	210	砂　岩	
〃	〃	59.3	57.7	39.4	175	〃	
貝層b	〃	77.4	47.0	34.3	200	花崗岩	
〃	〃	80.7	46.5	41.4	210	頁　岩	

f. 動物遺体(註)

・　軟体動物（表Ⅲ-2-3）

腹足類は有肺亜綱をのぞき、ブロック標本中から検出された種数は21種であり、スガイ(57～17%)が最も多数ををしめる、これについでレイシ（15～1%)、コシダカガンガラ（16～0.3%）が多数をしめる。有肺亜綱（陸産貝類）のなかでは、ヒダリマキマイマイが多いが、全体として幼貝・稚貝が多く、土中で越冬していたものが多いのではないかと考えられるので、種間比率の変化をただちに環境変化とむすびつけうるか否か問題である。

斧足類は、ブロック標本中にふくまれている種数は12種と腹足類のおよそ半数であり、変化にとぼしい。この事実は早大による調査の際にすでに指摘されている（西村・金子・菊池 1958：30)。斧足類中ではアサリがもっとも高い比率（57～15%）をしめ、それに次ぐものはイガイ（22～2%)、オニアサリ（10～0.15%）である。スガイとともにアサリの出土量の変化が顕著であり、貝層の構成の変化の主要な要因となっている。

・　環足動物

フジツボ (Balanus sp. indet.) 類が多量に出土している。小形の個体は完全な状態のものが見られるが、破砕されたものが圧倒的に多い。ブロック標本中から検出した破片の量を重量でしめせば、表Ⅲ-2-4のとおりとなる。重量から考えても、相当量のフジツボが採集されていたものと考えられ、アワビ等に附着していたものが貝類の採取に際して持ちこまれたものとは考えられない。アワビ等の出土量は僅少であるし、出土しているのはかなり大形の個体が主体をしめており、岩礁性貝に附着していたものとは考えられないからである。

・　節編足動物

ブロック標本中に、カニ（Decapoda sp. indet.）の皮甲の破片が少量づつ見られるが、種名は同定

できない。

・棘皮動物

ウニ類(*Heliocidaris sp. indet.*)管足および皮殻破片が多量に出土している。出土量には層位的な変化はほとんど見られない。現在、遺跡の周囲に棲息しているのは、ムラサキウニ(*Heliocidaris crassispina A.*)であるので、この種に比定できる可能性がたかい。

・脊椎動物

・ 魚類

早大による調査の際、もっとも多量に出土したのは、マグロであり、ついでマダイ、カツオの順をしめすとされている(*ibid*:32〜34)。今回の調査に際しても大きな変化はない。ただ、カツオの場合は、マグロと同様に主鰓蓋、前顎、歯骨等の個体数算定の基礎となる部位の出土量は椎体の出土量にくらべ、いちじるしくひくい。この理由は骨体そのものの保存の良否にもかかわるであろうが、捕獲から消費までの過程での処理方法にもかかわる可能性がある。

発掘中に採集された資料、さらに10㎜メッシュで回収された資料を、ブロック標本と比較すると魚種の構成がまったく異っており、ブロック標本中には、イワシ・サバ・メバル等の椎体が多量にふくまれており、そのなかには、幼魚もしくは椎魚のものと推定されるものが相当量ふくまれている。

以下、主要魚種について述べておく。

サメ(*Selachii gen. et. sp. indet.*)

椎体が計5個出土している。ブロック標本中には歯が1個検出されている(貝層b下半)。

イワシ(*Sardinops cf. melanosticta*)

さきにのべたようにブロック標本中に多量の椎体がふくまれており、そのなかには椎体径が1㎜以下のものがほぼ半数をしめている。顎骨等の出土量はすくない。

サバ(*Scomber cf. japonicus*)

椎体長が7㎜をこすきわめて大形のものが貝層bから出土している反面、ブロック標本中には椎体長2㎜前後のものが多量にふくまれ、全体の20%前後をしめる。

カツオ(*Enthynnus plemys L.*)

椎体はマダイに匹敵する出土量をしめしており、a—b間層ではマダイをしのいでいる。ただし、椎体以外は尾軸骨と歯骨が少量検出されているだけである。

マグロ(*Thynnus sp. indet.*)

種名は同定できない。ただし吻端の出土例が1例もないことから、カジキ類は含まれていないものと考えられる。Ⅲ-2-7表に見られるように、椎体径20〜40㎜前後のものが圧的に多く、とくに20〜30㎜のものが多い。早大調査の際には椎体径45〜55㎜のものが多いとされているが、これとは若干のズレがみとめられるようである。尾軸骨の背—腹方向の径で個体数と関連づけて体長組成を見ると、(Ⅲ-2-8表)過半数が径11〜15㎜の範囲におさまり、とくに12㎜台のものが多い。尾軸骨の数から見ると、30個体前後の遺存が推定される。a—b間層、および貝層bにとくに多く、Ⅰ-03ではとく

Ⅲ－2－3表(1)

			貝層 a 上半		貝層 a 下半	
ヒメエゾボラ	*Neptunea arthritica B*		1	0.32	1	0.05
セコバイ	*Colubralia castanea K. et H.*					
ミガキボラ	*Kelletia lischkei K.*					
アカニシ	*Rapana venosa (V.)*				2	0.11
ヒレガイ	*Ceratostoma burnetti (A. et R.)*		2	0.64		
レイシ	*Reishia bronni (R.)*		4	1.28	58	3.05
イボニシ	*Reishia davigera (K.)*				70	3.68
ツメタガイ	*Neverita (Glassaulax) didyma (R.)*					
エゾタマガイ	*Cryptonatica janthostomoides (K. et H.)*		1	0.32	3	0.16
ウミニナ	*Batillaria multifomis (L.)*		1	0.32	3	0.16
オオヘビガイ	*Serpulorbis (Clapodoma) impricatus*		+		+	
タマキビ	*Littorina brevioula (P.)*		11	3.51		
スガイ	*Lunella coranata coreensis (R.)*		84	26.84	1,089	57.29
イシダタミ	*Monodonta labio confusa T.- C.*		4	1.28	21	1.10
クボガイ	*Chborostoma argyrostma L. (T.- C.)*					
ユシダカカシガラ	*Omphalius rusticus (G.)*		1	0.32	122	6.42
マツバガイ	*Cellana nigrolineata (R.)*					
ヨメガカサ	*Cellana toreuma (R.)*				6	0.32
ユキカサ	*(Niveotectura) pallida (G.)*				2	0.11
トコブシ	*Haliotis (Sulculus) diversicdora R.*					
アワビ	*Haliotis discus sp. indet.*					
オオノガイ	*Mya (Arenomya) arenaria σ. M.*	l r	5 6	1.92	2 2	0.11
マテガイ	*Solen strictus G.*	l r				
イソシジミ	*Nuttallia olivacea (J.)*	l r			+	
ウバガイ	*Spisula (Ocardium) liensis (S.)*	l r	1	0.32		
ミルクイ	*Tresus (K. et. H.)*	l r	2 3	0.96		
ウチムラサキ	*Saxus purparatus (S.)*	l r			1	0.05

a—b間層		貝層 b		b下混	貝層 c
上半	下半	上半	下半		
				2 0.29	
			+		
				4 0.58	
	1 0.55				
					1 0.22
10 2.23	28 15.47	4 0.94		48 6.98	9 1.97
1 0.22	5 2.76	10 2.34	1 0.11	2 0.29	15 3.28
		+	+		+
	1 0.55	1 02.3			
	1 0.55	1 0.23		2 0.29	
			+		
4 0.89		4 0.94	2 0.22	6 0.87	
77 17.15		188 44.03	233 26.06	322 46.80	981 39.61
		2 0.47	4 0.45	5 0.73	
2 0.45					
19 4.23	29 16.02	10 2.34	18 2.01	16 2.33	14 3.06
			6 0.67	3 0.44	
			1 0.11		
	1 0.55				
	1 0.55				
				1^{+} 0.15	
	1 0.55	1 1 0.23	4 4 0.45	1 0.15	3 3 0.66
	4^{+} 5^{+} 2.76				2^{+} 3^{+} 0.66
			+		
		1 1 0.23	3 2 0.34	2 1 0.29	2 1 0.44
		3 3 0.70			
		3 2 0.70			

Ⅲ－2－3表(2)

			貝層a 上半		貝層a 下半	
ハマグリ	*Meretorix lusoria R.*	l r				
カカミガイ	*Dosinorbis (Phacosoma) japonicas R.*	l r	1	0.32		
オニアサリ	*Notochione jedoensis (L.)*	l r	3 3	0.96	28 26	1.47
アサリ	*Ruditapes philippinarum (A. et. R.)*	l r	171 172	54.95	421 453	23.83
マガキ	*Crassostorea gigas (T.)*	l r	7 5	2.24	2	0.11
イタホガキ	*Ostrea denselamallosa L.*	l r				
ナミマカジワ	*Anomia chinensis P.*	l r				+
アヅマニシキ	*Chlamys farreri F. (G. et. P.)*	l r				
ホタテガイ	*Patinopecten (Mizuhopecten) yessonsis (J.)*	l r				
イタヤガイ	*Pecten (Notovola) albicans (S.)*	l r				+
クジャクガイ	*Septifer bilocalasis (L.)*	l r				
イガイ	*Mytilus corscus G.*	l r	8 7	2.56	33 34	1.79
コベルトフネガイ	*Arca boucardi J.*	l r	2	0.64	3 3	0.16
カリガネエガイ	*Barbatia virescens O. (R.)*	l r	1	0.32	1	0.05
			313		1,901	

に大形の個体が多かった。

ブリ (*Seriola quinqueradiata T. et. S.*)

早大調査の際にくらべると多量に出土しており、ブロック標本をのぞいても、各層を通じ5～14%しめている。椎体74、歯骨左9、右4点が出土しており、10個体前後は遺存したものと推定される。大形の個体が3/4ほどをしめるが、ハマチ級あるいはそれ以下の椎体も出土している。

マアジ (*Trachurus cf. trachurus L.*)

出土量はすくなく、椎体が散発的に見られるだけである。ただしブロック標本中には小形のものの

a—b間層				貝層 b				b 下 混		貝層 c	
上	半	下	半	上	半	下	半				
										2	0.44
43 46	10.24	12 5	6.63	18 22	5.15	22 35	3.91	1	0.15	13 17	3.72
243 259	57.68	68 65	37.57	118 128	29.98	378 406	45.41	108 102	15.70	161 143	35.23
16 18	4.00			4 4	0.94	3 9	1.01	3 6	0.87	5 6	1.31
1	0.22										
				+							
				+						+	
										+	
		18 21	11.60					4 3	0.58		
12 8	2.67	7 7	3.86	43 35	10.07	168 154	18.79	88 151	21.95	41 42	9.19
				2 1	0.47	4	0.45	2 4	0.58	1	0.22
449		181		427		894		688		457	

椎体がやや多量に見られる。

スズキ (*Lateoraborax japonicus C. et. V.*)

ブロック標本以外には鰓蓋・前上顎が散発的に出土しているだけである。ブロック標本中にはセイゴ級あるいはそれ以下のものの椎体も見られるが、多くはない。

マダイ (*Pagrosomus major Q. et. G.*)

前上顎、歯骨等によって判定するかぎりクロダイ (*Sparus longispinis T. et. S.*) の遺体は見られないので、椎体をもすべてマダイのものと見做しておいた。

Ⅲ－2－4表　フジツボ層位別出土量

G-00 貝層a	上半	368
	下半	273
〃	a—b間層上半	268
〃	〃 下半	354
〃	貝層b 上半	268
	〃 下半	154
G-03 貝層b		379
G-00 貝層b	下混	58

（単位　グラム）

Ⅲ－2－5表　各種魚類脊椎層位別出土量

	貝層a	a—b	貝層b	b下混	貝層c	計
サメ類 *Lamnina gen. et. sp. indet*	2 (1.49)	1 (0.48)	1 (0.22)		1 (4.00)	5 (0.59)
マイワシ *Sardinops melanosticta*		2 (0.95)				2 (0.24)
ニシン科 *Clupediae gen. et. sp. indet.*			1 (0.22)			1 (0.12)
ボラ科 *Mugilidae gen. et sp. indet.*		1 (0.48)	2 (0.44)			3 (0.36)
タラ科 *Gadidae gen. et sp. indet.*		1 (0.48)	2 (0.44)			3 (0.36)
スズキ *Lateorabrax japonicus*	2 (1.49)	3 (1.43)	10 (2.18)			15 (1.78)
マダイ *Pagrus major*	58 (43.28)	51 (24.28)	200 (43.57)	8 (53.33)	14 (56.00)	331 (39.31)
マアジ						
ブリ *Seriola quinqueradiata*	20 (14.93)	28 (13.33)	25 (5.45)		1 (4.00)	74 (8.79)
カツオ *Euthynnus pelamis*	49 (36.57)	108 (51.42)	197 (42.92)	6 (40.00)	9 (36.00)	369 (43.82)
サバ属 *Scomber cf. japonicus*			6 (1.31)	1 (6.67)		7 (0.83)
メバル *Sebastes inermis*	2 (1.49)	5 (2.38)	5 (1.09)			12 (1.43)
不詳 a *Fam., gen., et sp. indet.* a		1 (0.48)				1 (0.12)
不詳 b *Fam., gem., et sp. indet.* b			1 (0.22)			1 (0.12)
	133 (15.79)	210 (24.94)	459 (54.51)	15 (1.78)	25 (2.97)	842

再三述べたようにマグロにつぎ、カツオとならぶ主要魚である。個体数は50～60個体前後にはのぼるのものと考えられる（表３-11)。前上顎骨長25㎜前後から復原長55㎜前後（完全標本では47.5㎜が最大）までの巾があり（表３-12)、35㎜前後のものがもっとも多い。早大調査の際には椎体の出土量はすくなかったとされているが、別表のとおり多量の出土をみた。

メバル（*Sepastas imermis C. et V.*)

とくに多量ではないが、各層、各地区から平均した出土量をしめしている。ブロック標本中には椎体長２㎜前後のものが相当量見られる。

・　鳥類（*Aves*)

早大調査の際には種名不詳の骨片が若干出土したにとどまっているが、今回は、H-00区に比較的集中した出土が見られた。しかし、絶対量はきわめてすくない。

(*Coruus of. corone orientalis E.*)

中手骨がａ—ｂ間層（Ｉ-03）から左右各１点、貝層ｂ（G-03）から左１点、計３点、２個体分が出土している。

ガンカモ科（*Anatide*)

マガモ（*Anas cf. platyrhynchos*）大のものの左右上腕骨、左烏口骨２（１点は若い個体)、左撓骨・同尺骨、右脛骨各１点が出土している。２個体程度の個体数が推定される。

カイツブリ科（*Podicipidae, gen. et sp. indet.*)

貝層ａ（H-00）から左上腕骨１点が出土している。

キジ(？)（*Phasianus cf. colchiqus*)

ａ—ｂ間層（H-00）から右上腕骨が１点出土している。

・　哺乳類（*Mammalia*)

鳥類とおなじく出土個体数も、種数もすくない。表Ⅲ-３-２-14にしめしたように、各層を通じてＩ-03に比較的まとまった出土状態が見られた（表示した重量は部位判定可能な遺体をもふくめた総重量であるが、クジラの遺体は除外した)。

イルカ（*Delphinidae gen. et sp. indet.*)

貝層ａから脊椎３、頸椎１貝層ｂから耳骨(右)１、ｂ下混貝土層から脊椎１が出土している。

クジラ（*Cetacea gen. et sp. indet.*)

脊椎骨３、肋骨片１がいづれも貝層ａから出土している。

鰭脚類　（*Pinnipedia gen. et sp. indet.*)

貝層ａから左上腕骨１点が出土している。遠位端・近位端ともに欠損（食肉目の動物の噛痕がある）しており、層・種名を判定できないが、大きさから見てアザラシか、あるいはオットセイのメスと推定される。

ムササビ（*Petaurista cf.*)

Ⅲ－2－7表　マグロ脊椎骨の背—腹径の計測値

Distribution of dorso-ventral diameter of *Thynnus* vertibra.

層位＼クラス	～10	10～20	20～30	30～40	40～50	50～	計
貝層 a	19	55	64	89	11	2	260
a — b	19	109	161	83	18	2	394
貝層 b	38	96	224	144	38	6	546
b 下混		14	14	12			40
貝層 c		17	36	11	4	1	69
計	28	291	399	339	71	11	1,229

Ⅲ－2－8表　マグロ尾軸骨の背—腹方向直径の計測値

Distribution of dorso-ventral width of *Thynnus* urostyle.

層位＼サイズ	～10	11～15	15～20	20～	計
貝層 a		4	1	1	6
a — b	1	5	4	1	11
貝層 b		4	5		9
b 下混		2			2
計	1	15	10	2	28

Ⅲ－2－9表　マグロ遺体の層位別個数

Stratigraphical frequency of *Thynnus* remains.

	Premaxillary		Mandible		Hyomandibular		Urostyle
	L	R	L	R	L	R	
貝層 a	1^+			4	2	6	7
a — b	3	2	2	5	1	5	11
貝層 b		1^+	2	2	3	2	9
b 下混							4
	4^+	3^+	4	11	6	13	31

貝層aから、M_2、M_3をとどめる右上顎骨片が1点出土している。

ウサギ（*Brachyurus sp. indet.*）

貝層bから左右脛骨が各1点出土している。

イヌ（*Canis familialis*）

a—b間層から左上腕骨遠位端が出土している。

ニホンイノシシ（*Sus scrofa leucomystax*）

貝層aから、M_3 萠出中のものと萠出完了した上顎骨左右各1点、側頭骨（右）1点、耳骨1点が出土している。a—b間層からは、M_3 萠出中の左上顎（オス）が出土している。貝層bからは、第一頸椎片1、骨端の骨化の見られない右上腕骨1、M_3の残る左下顎1、右中足骨1が出土している。貝層cからはM_2・M_3(萠出中）を残す右下顎骨、左側頭骨、右脛骨（関節面剝落）が出土している。

Ⅲ－2－10表　マダイの各部位の出土量　Stratigraphical distribution of *Pagrosomus major* remains.

		貝層 a	a — b	貝層 b	b 下混	貝層 c	計
前額骨			1	9			10
後頭骨		2	1	2			5
主鰓蓋	L		1				1
	R					1	1
間鰓骨	L	1	4		1	1	7
	R	3		1	1		5
下鰓骨	L	5	3	6	1		15
	R	3	2	3	1		9
前顎骨	L	7	6	11		1	24
	R	7	1	11			19
歯骨	L	2	4	6		2	14
	R	4	2	6			12

貝層a・bでそれぞれ2個体程度の個体数が推定されるほかは、いづれも1個体をこえないものと思われる。

ニホンシカ（*Cervus nippon*）

貝層aからは落角の角座に近い部分が1点出土しただけである。a—b間層からは右距骨1、右目状骨が各1点出土している。貝層bでは、右側頭骨片、第一頸椎片、右第三指骨、右脛骨、仙椎片1、左踵骨1が出土している。貝層b下混貝土層からは、右下顎枝片・右踵骨（遠位端）片各1が出土。

この哺乳類の出土量は、従来筆者が取扱った宮城・浅部（林1971、1972）、同・館（*Ibid.*）同・沼津等にくらべていちじるしく少い量である。この原因は、遺跡の性格・年代差・調査個所の問題等が関係すると考えられるが、現在のところ不明である。

Ⅲ－2－11表
マダイの前上顎骨・歯骨の長さ計測表
（D：歯、骨P：前上顎骨）
Distribution of length of pnemaxirary, and dental bones of *Pagrosomus major*.

	D.	P.
～25	1	1
25～28	5	4
28～31	2	4
31～34	1	4
34～37	0	2
37～40	2	6
40～43	0	5
43～46	3	1
46～	3	4

〔註〕種名検索には、今泉1963、小林1965、宮地・川那部・水野1963、蒲原1655、1961、吉良1959、によった。また遺体部位の名称は原則として広島大学生物学会1971の用語に拠った。魚類については、松原・落合1965をも参照した。

Ⅲ－2－12表　ブリの各部位骨の出土量

		貝層 a	a — b	貝層 b	b 下層	貝層 c	計
主鰓蓋	L	1	1	1			3
	R	2	3				5
前顎骨	L	1		2			3
	R	1		2			3
歯骨	L	1	6				7
	R		2	1			3

Ⅲ－2－13表　スズキの各部位骨出土量

		貝層 a	a — b	貝層 b	b 下混	貝層 c	計
主鰓蓋骨	L						
	R	2	1				3
主顎骨	L		1				1
	R		1				1
前顎骨	L	3					3
	R	2	1				3
歯骨	L		1				1
	R		1				1

Ⅲ－2－14表　各層出土の哺乳動物遺体重量

	G—00	G—03	H—00	H—03	I—03	計
貝層 a	151		65	22	363	601
a — b	60		22	58	440	580
貝層 b	79	208	151			438
b 下混	16		89		9	114
貝層 c					259	259
	306	208	327	80	1,071	1,992

3．南斜面土器群

〔包含状況〕

表土（平均10～15㎝、角礫を多くふくむ淡褐色砂質壌土、無構造）を除去すると、土器の高い部分が直ちに露出し、粘板岩破片を多量にふくむ、褐色粘土質壌土（顆粒状構造）の上に貼りついた状態で検出された。いわゆる包含層にあたるのは、炭化物片、焼土小塊をふくむ厚さ平均20㎝の暗褐色粘土質壌土で、きわめて堅く、小方柱状構造をしめす。なお、土器に骨殻片・“ニガリ”様物質等が附着しているものもあるので、かつてこの地点にも貝層がひろがっていた可能性がある。

〔分布状況〕

完形品（3点）をふくめ、口縁部大破片、底部67点の分布をプロットしたのが、Ⅲ－3－1図であるが、これでみると、斜面上方に投げすてられた一群の土器が、浅いくぼみにそって下方に移動し、斜面裾部に溜ったように判断される。

なお、南斜面の土器散布範囲からは、石器はきわめて少数しか出土しておらず、磨石が4点発見されたにとどまった。時間的な制約と、土質がきわめて硬いために、上ゲ土の篩分けを行えなかったので、断定はできないものの、より綿密な発掘を行った貝層中、あるいは貝層ブロック標本中にもフレ

イクが見られないことから判断すると、石器もしくは剝片の量が多くはなかったことは否定できないであろう。これもまた南斜面土器群の性格を検討するうえでひとつの資料となろう。

〔土器群〕

出土した土器のうち、あきらかに異型式と考えられる破片はごくすくなく、Ⅲ－3－2図にしめしたものの範囲をこえない。そのなかでは大木5式に属するものがもっとも多い。

(1) 分　類

A. 器　種　　深鉢形と鉢形に限定される。

A_1 深鉢（Ⅲ－3－3図）

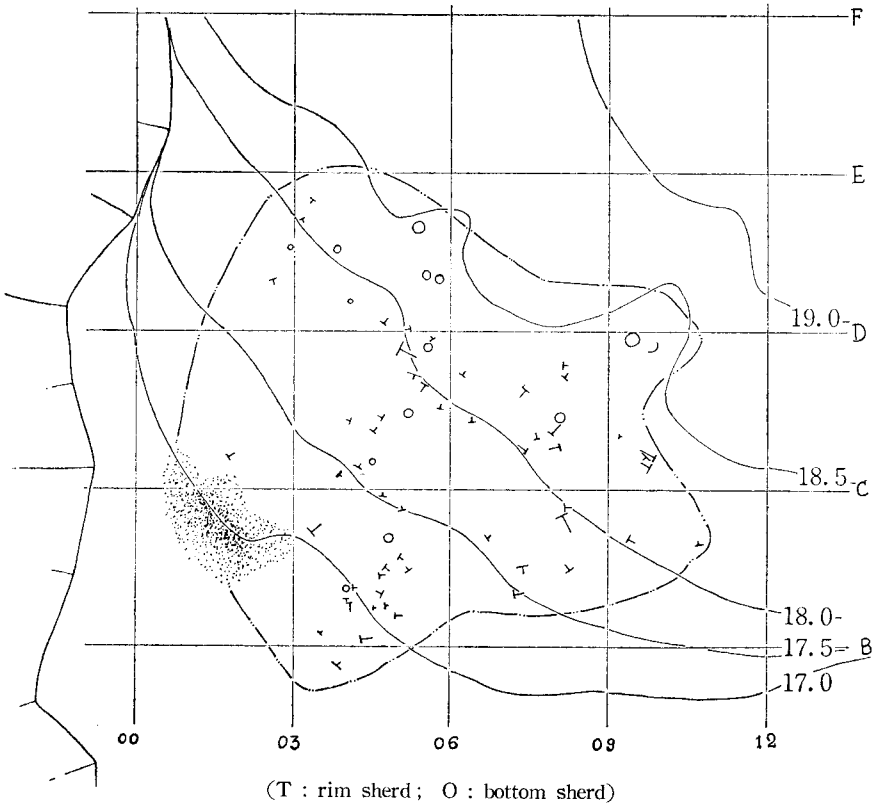
Ⅰ. 単純な深鉢

a　口縁端まで直線的に開くもの

b　口縁端でわずかに外反するもの

Ⅱ. 口縁が外反するが、最大径が胴部にあるもの

a　口縁の反りの弱いもの



(T : rim sherd ; O : bottom sherd)

Ⅲ－3－1図　南斜面土器群分布平面図　Distribution map of potrsЧerds on southern slope.

b　口縁の反りの強いもの（内面に不明瞭ながら稜をもつ）

Ⅲ．胴腹部がふくらみをもち、下半部がすぼまって円筒形ないし逆台形の底部につづくもの

a　口縁部が外折ないし直立するもの

b　口縁部の屈曲、および胴のふくらみに下端の屈曲が明瞭な曲線の変換点をもたないもの

Ⅳ．円筒形、または逆台形の胴部に外開きしながら口縁端で直立ないし内彎するもの。

A_2　鉢

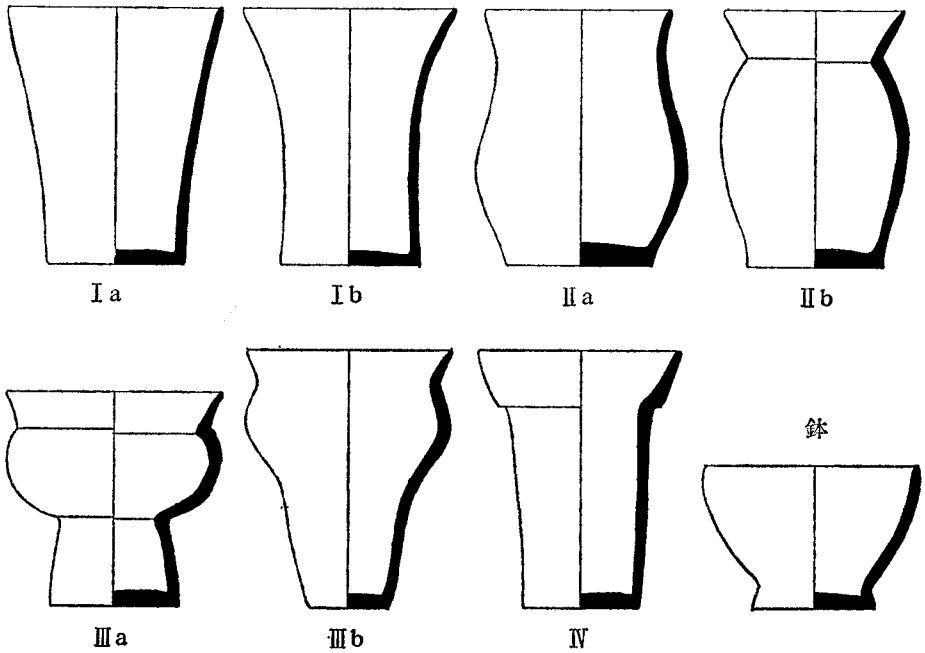
強く外開きする体部に、短い円筒形の底部がつく。

以上にあげた基準にもとづいて、器形・器種の判別できる86個体の内訳は次のとおりとなる。

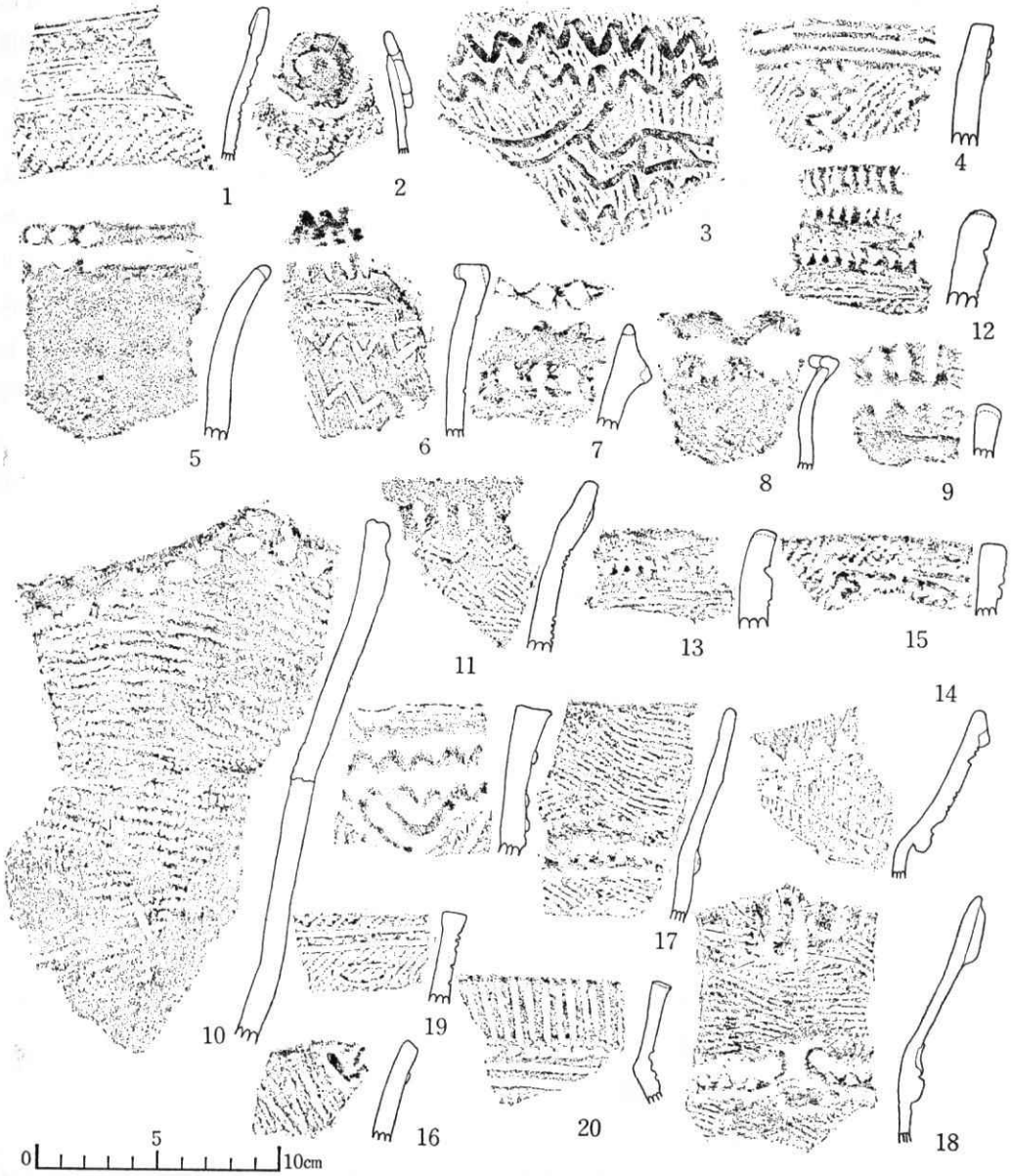
深鉢　　83個体

Ⅰ	a	16（平縁のみ）			
	b	8（平縁	7、	波状縁	1）
Ⅱ	a	14（〃	14、	〃	4）
	b	8（〃	6、	〃	2）
Ⅲ	a	16（〃	9、	〃	7）
	b	7（〃	3、	〃	4）
Ⅳ		7（〃	4、	〃	3）

鉢　　3個体



Ⅲ－3－3図　南斜面出土土器群器形分類模式図　Schematic profile of potteries from Southern Slope.



Ⅲ－3－2図　南斜面出土の異類土器　Miscellaneus potsherds from southern slope
（1～11：大木5　12～14：五領台系　15、16：大木8 b　17、18：堀之内Ⅰ併行
19：堀之内Ⅱ併行　20：？）

B. 装　飾

装飾モティーフは口縁部の貼附帯の上、胴腹部のふくらみの上半に表現される場合が圧倒的におおく、下半部にまでひろがる例は鉢をふくめてし7例にすぎない。体部装飾モティーフはⅢ-3-4図にしめしたように、連弧文と上下向合せの山形文が基本であり、垂直方向の分割線の有無により四種類にわかれる。構成要素は、連弧・山形である点では従述する口縁部装飾モティーフとおなじではあるが、結合の原則がことなっており、結果としてまったく別のモティーフとなっている。

口縁部装飾モティーフは、Ⅲ-3-5図にしめしたように、口縁部におかれる円圏（指頭廻転による窩文と、ボタン状貼りつけの場合がある）ないし形骸化した橋状把手の周辺装飾（重弧とV字にわかれる）と、その間をつなぐ文様によって構成されている。前者は四個を単位として配置されており、突起とむすびつく場合がおおい。後者は、水平方向の平行線、斜位の平行線、連続山形の三種類に大別される。なお附加的な要素として、平行線の間、山形文の余白部に、刺突・縄文原体圧痕がくわわり一見複雑な表現のとられる場合もある。なおこの場合には半截竹管文が圧倒的におおく。円形竹管が4例、原体圧痕は1例にすぎない。

器形の類別の項でとりあげた83個体の深鉢についてモティーフの類別をおこなってみると、つぎのようになる。

Ⅰ a　b_1の拡張　1個体
　b　なし
Ⅱ a　なし
　b　a_1とⅡ・b_1とⅠの組み合せ各1個体
Ⅲ a　a_1とⅡ・Ⅲの組み合せ各1個体
　　b_1とⅡ・Ⅲの組み合せ各1個体
　　b_2とⅡの組み合せ3個体
　　b_1の拡張1個体
　　c_1とⅡ・Ⅲの複合組み合わせ1個体
　　c_2とⅢの組み合せ1個体
　　d とⅢの組み合せ1個体
　　e とⅢの組み合せ1個体
　b　b_1とⅡ、Ⅲのみ組合せ各1個体
Ⅳ　a_1とⅡ、c_1の変形各1個体

この結果から見て、Ⅲ a がもっとも装飾的要素がつよく、南斜面土器群のなかで特徴的なタイプであると言いうる。そのなかで主要な役割をはたすのは、各種の円圏・把手周辺装飾のつなぎ文様としての山形文である。

装飾モティーフの見られない個体のうち、もっとも頻繁に見られるのは、水平位平行線であり、それに次いで山形文である。器形別の頻度は表Ⅲ-3-1のとおりである。

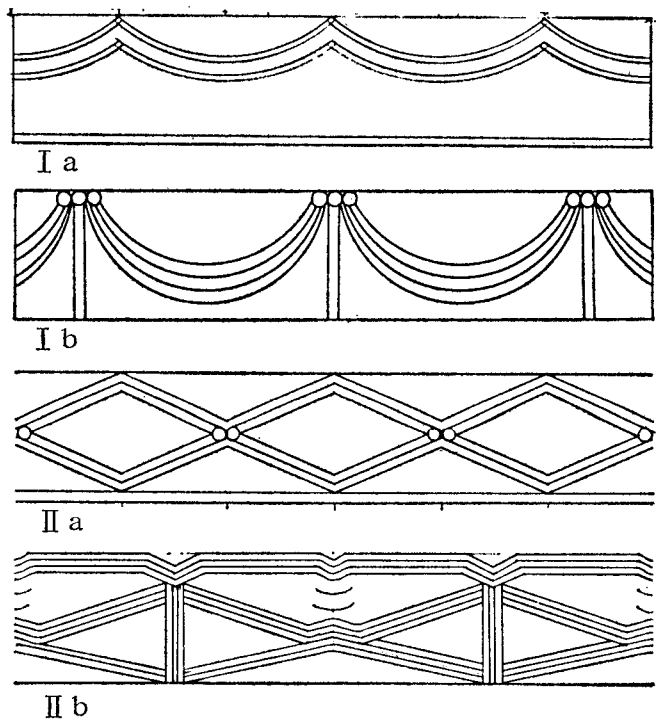
装飾モティーフ・文称の面から見ると、深鉢Ⅳは円圏もしくは把手を中心とする附加文とそのつなぎ文様を中心とする構成をしめすものがすくなく、橋状把手の変形と考えられる垂直位の粘土帯（その上に水平位の刻目が入る）を4個所に貼りつけ、その間に水平位平行沈線と連続山形を組みあわせた深鉢Ⅰ～Ⅲには見られないモティーフが中心となる。この点で、深鉢Ⅳは異質であると言えるし、描出技法から見ても、Ⅰ～Ⅲの主流をなす指頭等による太い沈線、半截竹管による鋭い平行沈線は見られず、篦状もしくは丸棒状施文具によるものが主流をしめている。

鉢（3－4図33、3－6図25）

突起の部分以外には口縁帯に装飾をもたず、直接深鉢のタイプⅢａにみたM字、逆M字を組みあわせたモティーフが展開されている。

(2) 法　量

完形に復原されたものが1点しかなく、高さを直接知ることのできる資料にとぼしい。口径を見るとⅢ－3－2表のとおり、18～26cmのものが過半数をしめている。底径はⅢ－3－3表のとおりで、15～20cmのものが圧倒的に多い。高さは、これらの関係から推して25～35cm前後のものが多いものと考えられる。

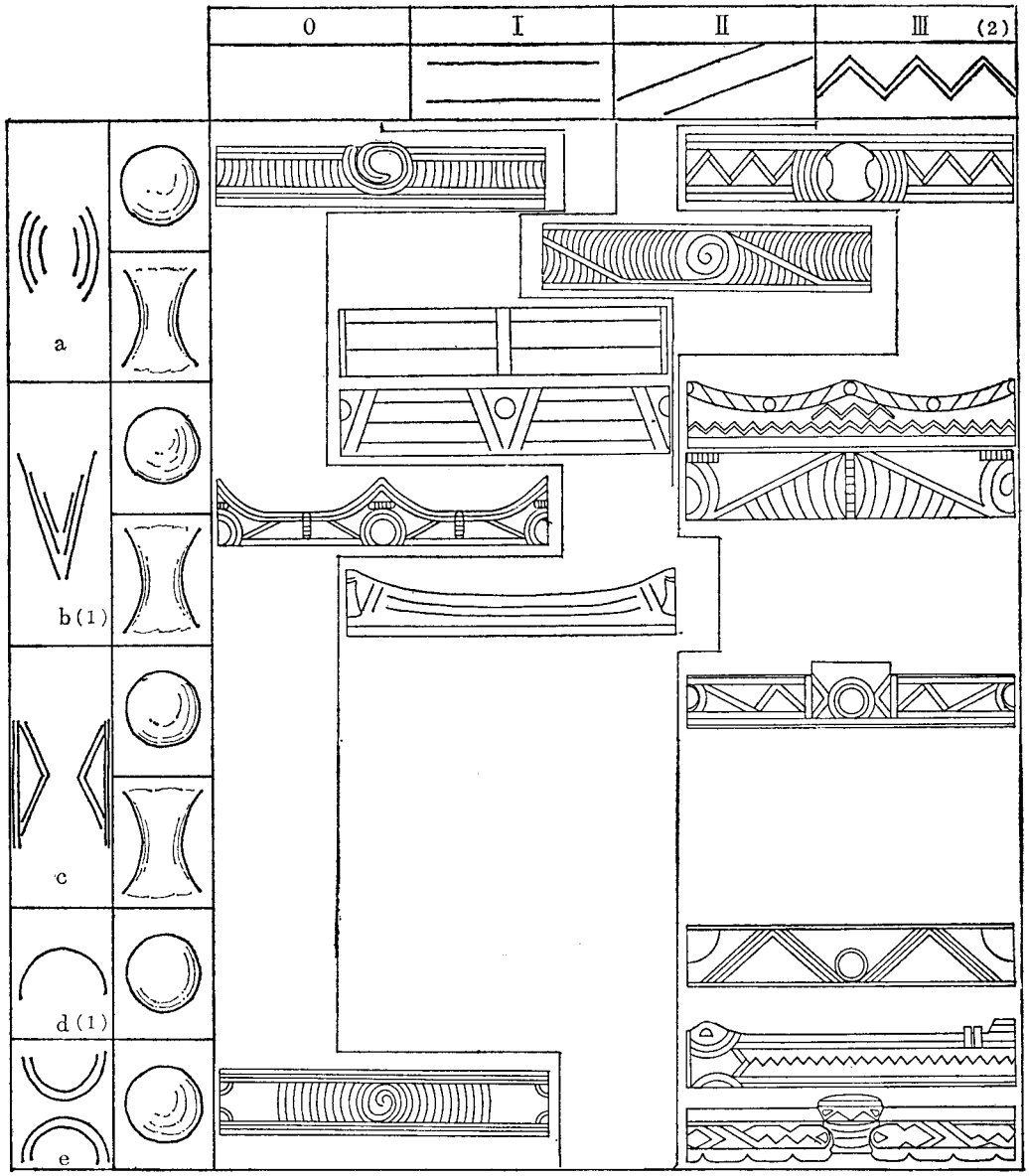


Ⅲ－3－4図　南斜面土器群体部装飾モティーフ
Schematic diagram of decorative motives on body sherds from southern slope.

Ⅲ－3－1表　装飾文様と器形の対応

Correlation of ornament and vessel types.

器形 / 文様	Ⅰ a	Ⅰ b	Ⅱ a	Ⅱ b	Ⅲ a	Ⅲ b	Ⅳ
水平平行線	1	2	8	1		2	-5
斜位平行線				1	1	-1	
山形		1		1			



Ⅲ－3－5図　南斜面土器群の口縁部モティーフ

Schematized diagram of decorative motives on rim sherds from southern slope potteries

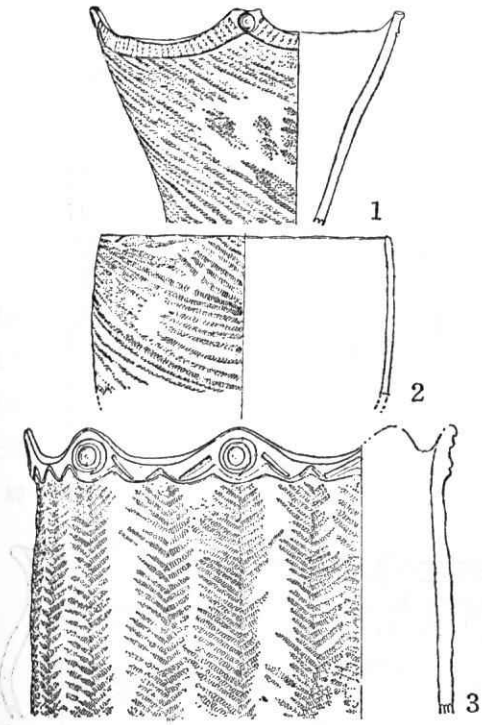
(1) 例示したものの逆位もふくむ　(2) 部分的に表現される場合もある

(3) 胎土組成：焼成

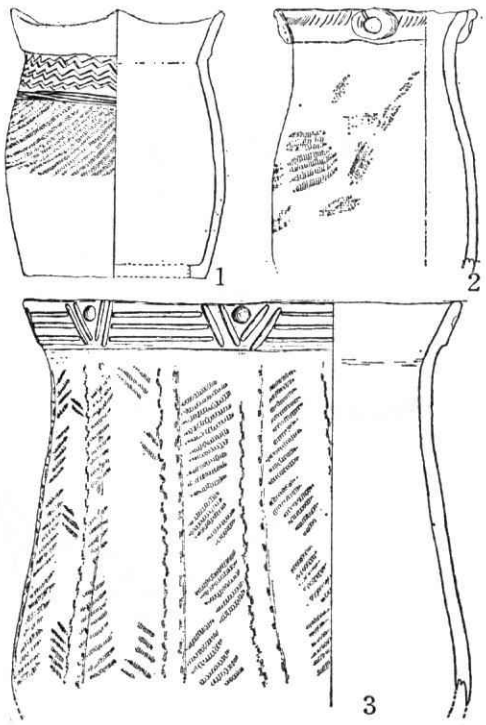
全体として混和物が多く、粘板岩・石灰岩礫のほか、花崗岩に由来すると推定される長石、ついで石英が多い。さきにもふれたとおり、深鉢タイプⅣとしたグループは、均質な胎土をもちい、石英・雲母が目立つ点で、差異を指摘できる。焼成もまた、Ⅰ～Ⅲのタイプが硬いが焼締りは悪いのに対し、タイプⅣは軟質ではあるが、焼締りは良い。

(4) 成形・調整 （図版Ⅲ-1）

屈曲部から剝落したものが多く、とくに胴腹部にくびれをもつものは、ほとんどすべての個体が底部と胴腹部との屈曲点で剝離している。また口縁帯に屈曲をもつ場合にもこの様な事例がおおい。したがって、屈曲のある個体の場合、口縁帯・胴腹部・底部の三ブロックにわけて成形し、接合したものと考えられる。また胴腹部も上半部と下半部にわけて成形し接合したものが多いようであり、底面は筒形につくった底部に円盤形につくった底面をはめこみ、外周に粘土紐をつけたしてでつくっている。さきにのべた三ブロックの接合にあたっては、各ブロックがある程度乾燥し固化したのちに、粘土帯をつけ足すという形でおこなわれていたらしく、剝落痕が外面とほとんど違わぬ色調を呈している場合がかなり見られる。



Ⅲ-3-6図 南斜面出土の土器
Potteries from southeru slope.
（2、3：深鉢Ⅰa 1：深鉢Ⅰb）



Ⅲ-3-7図 南斜面出土の土器
Potteries from ssouthern slope.
（2、3：深鉢Ⅱa 1：深鉢Ⅱb）

Ⅲ－3－2表

Xi	Xi'	fi	$fiXi'$	$fiXi'^2$
～8	−3	2	−6	18
12	−2	2	−4	8
16	−1	7	−7	7
20	0	23	0	0
24	1	15	15	15
28	2	11	22	44
32	3	7	21	63
36	4	5	20	80
40～	5	5	25	125
計		77	66	360

$\overline{x}=20$; $C=40$　　$M=20+\frac{4\times66}{77}=23.43$

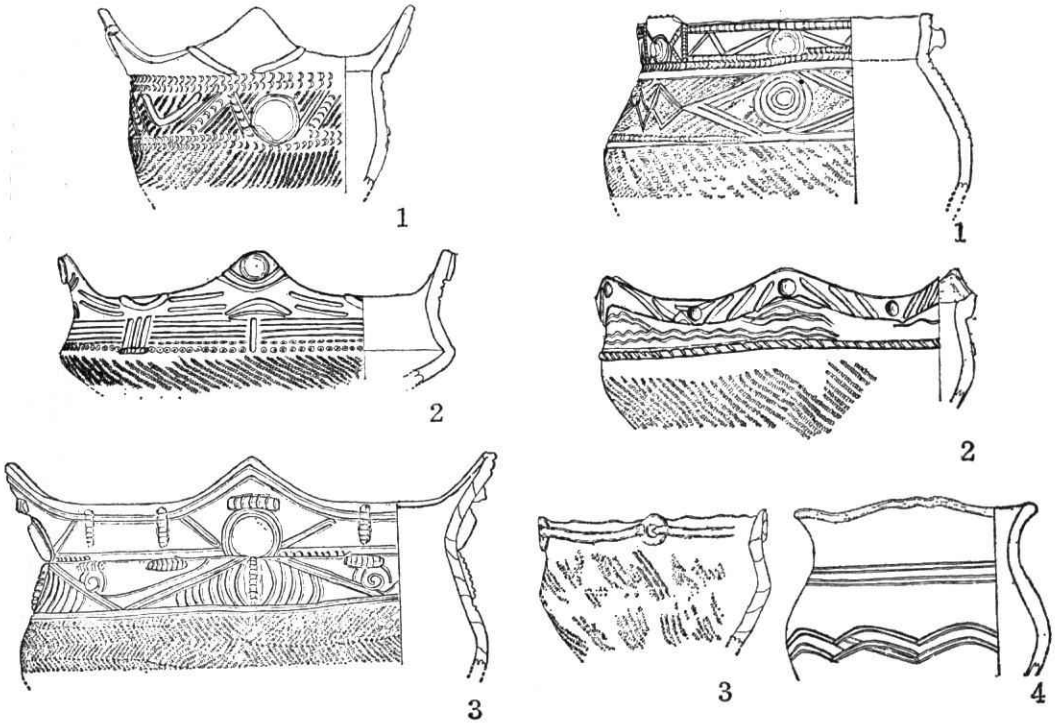
$\sigma=\sqrt{16\left\{\frac{360}{77}-\left(\frac{23.43-20}{4}\right)^2\right\}}=7.94$

Ⅲ－3－3表

Xi	Xi'	fi	$fiXi'$	$fiXi'^2$
～3	−5	1	−5	25
5	−4	3	−12	48
7	−3	9	−27	81
9	−2	17	−34	68
11	−1	26	−26	26
13	0	29	0	0
15	1	12	12	12
17	2	8	16	32
19	3	4	12	36
21	4	1	4	16
23	5	1	5	25
25～	6	1	6	36
計		112	−49	405

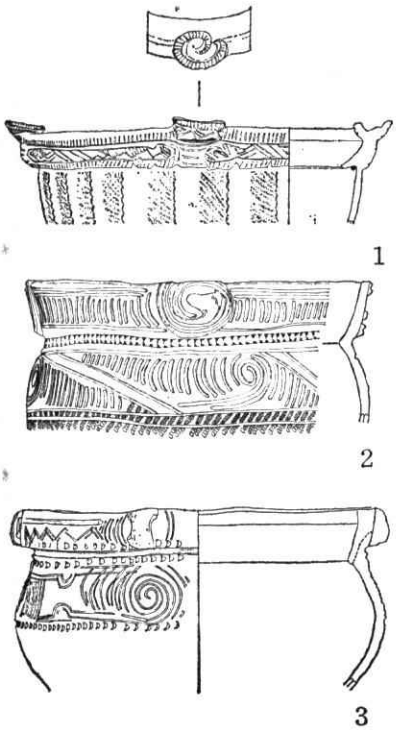
$\overline{x}=13$; $C=2$　　$M=13-\frac{2\times49}{112}=12.13$

$\sigma=\sqrt{4\left\{\frac{405}{112}-\left(\frac{12.125-13}{2}\right)^2\right\}}=3.70$

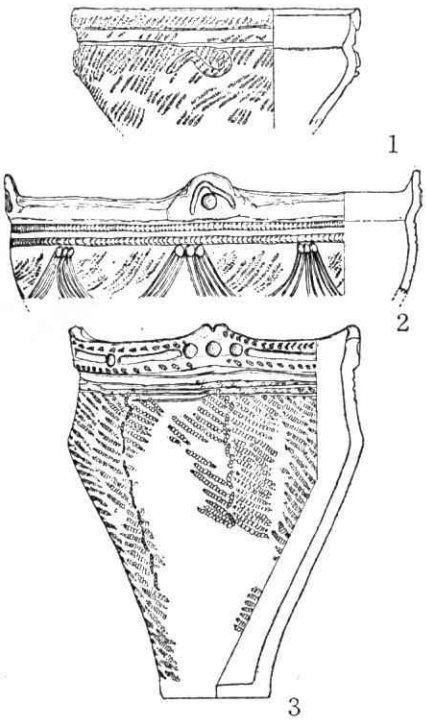


Ⅲ－3－8図　南斜面出土の土器

Potteries from southern slope. （1～3：深鉢Ⅲa ; 4～7：深鉢Ⅲb）



Ⅲ-1-10図　南斜面出土の土器
Potteries from southern slope.
（1、2、3：深鉢Ⅲb）



Ⅲ-3-11図　南斜面・貝層a出土の土器
Potteries from southern slope, and shell layera.
（1：深鉢Ⅲb　2：鉢　3：貝層a）

調整は、底面に粗い編物痕迹が見られる場合をのぞけば、底面は粗いヘラミガキが施されており、この調整は底部にまで及んでいる。しかし、体部上半にはヘラ調整はおよばず、少数のものに口縁帯内面にヘラ磨きの痕迹がみられるにとどまっている。大部分は器内面は横位の指（？）ナデにより調整されており、タイプⅠ、Ⅱの深鉢の一部には縦位のナデ調整も見られる。器外面の調整には縄文・撚糸文がもちいられているが、口縁帯以下がまったく無文のもの（ナデ）が1個体あるし、4個体出土している小形（径7.5～5㎝）土器もナデ調整のみである。

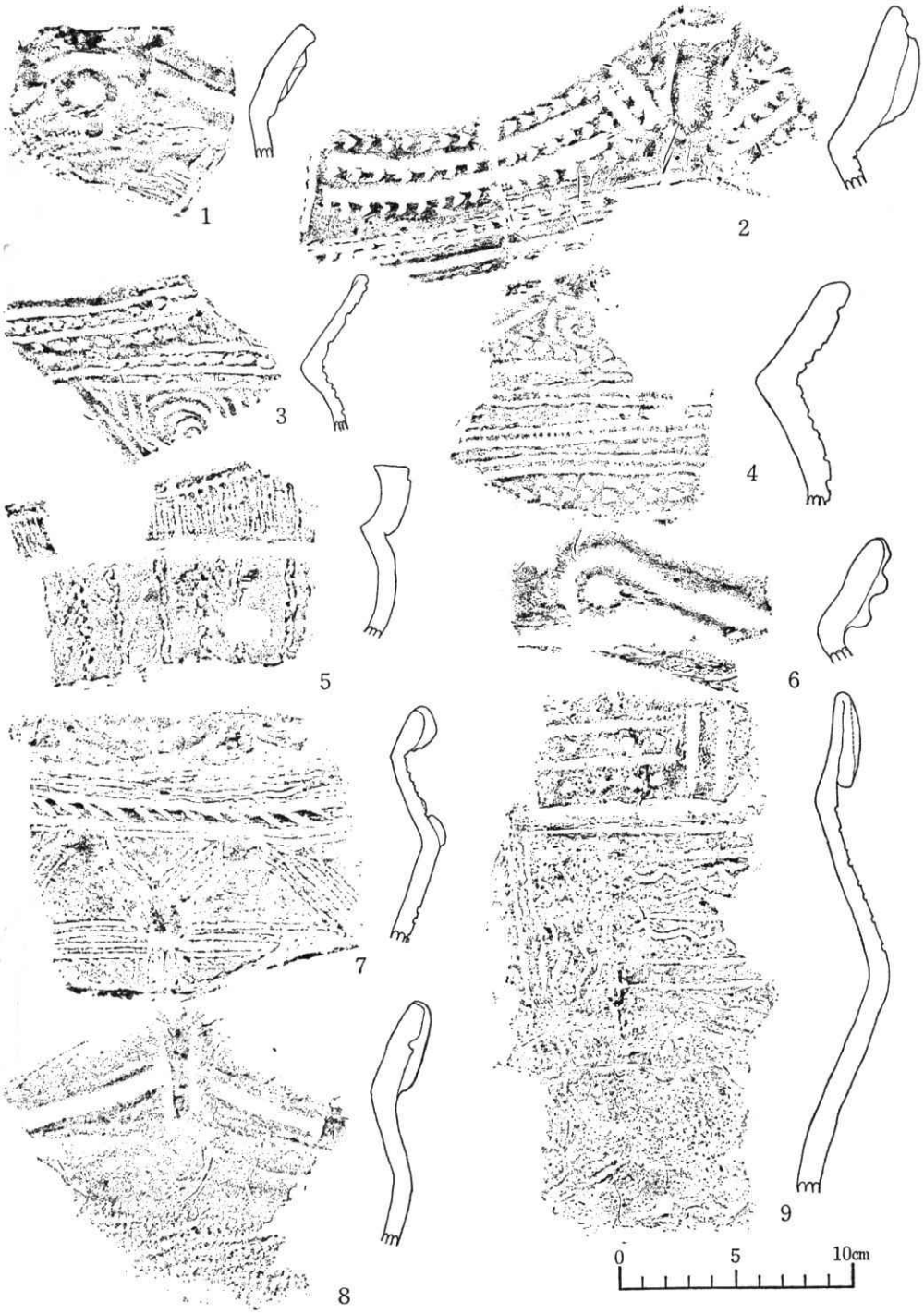
縄文・撚糸文原体の構成は、

$$L\left\{\begin{matrix} R\left\{\begin{matrix} l \\ l \end{matrix}\right. \\ R\left\{\begin{matrix} l \\ l \end{matrix}\right. \end{matrix}\right. \rightarrow : 18 \qquad L\left\{\begin{matrix} R\left\{\begin{matrix} l \\ l \end{matrix}\right. \\ R\left\{\begin{matrix} l \\ l \end{matrix}\right. \end{matrix}\right. \searrow : 5$$

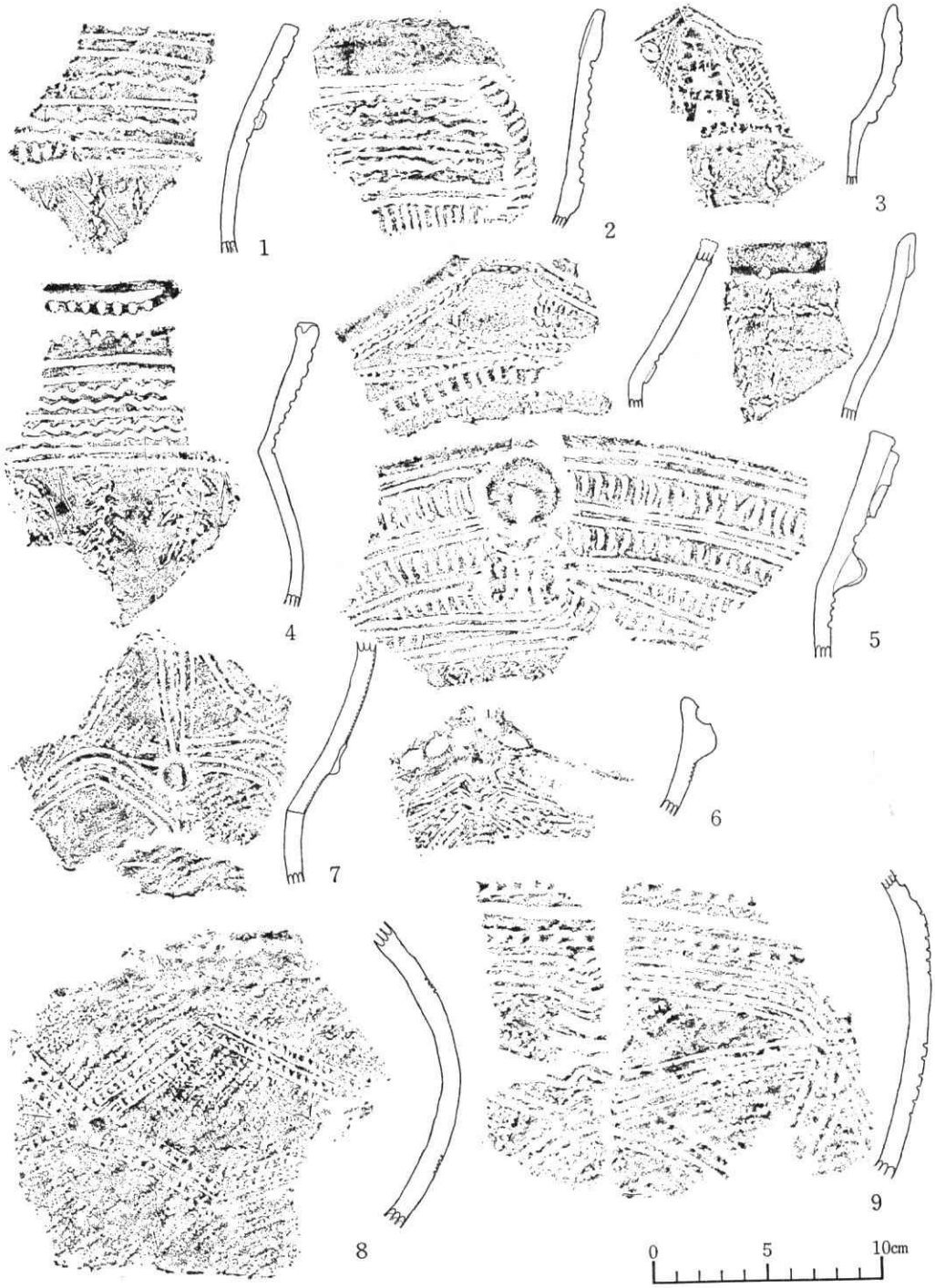
$$R\left\{\begin{matrix} L\left\{\begin{matrix} r \\ r \end{matrix}\right. \\ L\left\{\begin{matrix} r \\ r \end{matrix}\right. \end{matrix}\right. \rightarrow : 23 \qquad R\left\{\begin{matrix} L\left\{\begin{matrix} r \\ r \end{matrix}\right. \\ L\left\{\begin{matrix} r \\ r \end{matrix}\right. \end{matrix}\right. \swarrow : 8$$

のほか、第二種結束による帯状文が3 $\left(L\left\{\begin{matrix} R \\ R \end{matrix}\right. + L\left\{\begin{matrix} R \\ R \end{matrix}\right.\right)$、木目状撚系文が2、多軸撚糸が2、となっている。

Ⅲ－3－12図　南斜面出土土器　Potsherds from Southern Slope.
（1、2：Ⅰa　3～5：Ⅰb　6～12：Ⅱa　13～16：Ⅱb）



Ⅲ－3－13図　南斜面出土土器　Potsherds from Southern Slope.
（1～5：Ⅲa　6～9：Ⅲb）



Ⅲ-3-14図　南斜面出土土器　Potsherds from Southern Slope.
（1～5：Ⅳ　6：鉢　7～9：胴部）

4．考　　察

本貝塚は、東北～西南に延びる尾根の上に形成された比較的小規模な貝塚であり、西縁にそって延びる高みに住居がいとなまれた可能性がつよく、一部には埋葬もおこなわれていたらしい。しかし、出土遺物の年代の巾が（弥生・土師は別としても）前期初頭から後期初にまで及ぶことから長期にわたって利用されていたと考えられるわりには、一時期あたりの遺物の出土量はきわめてすくなく、長期にわたって集中的な占拠、もしくは永続的な本拠地として利用された可能性はほとんど考えられない。清水貝塚の周囲を見ると南側には全国的にも有数の規模をもつ蛸ノ浦貝塚がありその西端部には南斜面土器群と同時期の土器の出土する地点がある。

この遺跡が集中的に利用されたのは前期中葉から末にかけて（大木４～南斜面土器群の時期まで）その後若干の空白をおいて中期末から後期初めにかけて（大木９新期か門前期）であるから、蛸ノ浦貝塚の存続期間とほぼ一致すると言いうる。大船渡湾東岸には、清水・蛸ノ浦両遺跡以外には年代的に符合する時期の遺跡は見られない、とすれば、本遺跡は、蛸ノ浦貝塚の分村的な性格を考えるのがもっとも妥当であろう。

この推定を前提とすれば、清水貝塚を形成した人々の主要な生業活動は、動物遺体の圧倒的な比率をしめるのが、魚類であり、それ以外の鳥類・哺乳類は見るべき量に達していないこと、また労働用具も釣針以外には微々たる量であることを考慮すれば、西村らの指摘するとおり、漁撈が中心であったと考えざるをえないであろう。ただ、近接する蛸ノ浦貝塚の分村と考えるならば、漁業上の立地としてさほど差のあるとも考えられない清水をえらんで遺跡がいとなまれているという事実は、ただ単純な漁業キャンプとばかり解釈できない問題もあるように思われる。可能な解釈としては予祝儀礼の場、ある通過儀礼の場として清水の地が利用されたという見解も成立しよう。

その性格はともかく、清水貝塚を形成した人々の漁撈活動は、前期中葉～末葉という年代にもかかわらず、かなり高次に組織化されたものと考えることができる。動物遺体の項でふれたように、フジツボの出土量が無視しえないものであることは興味ぶかい。現在でもフジツボは三陸沿岸では磯魚の餌として利用されておることを考えると、釣餌として意図的に採取されたものと考えることもできよう。同様に食料資源として利用価値がたかいとは思われないスガイ・イシダタミ等の出土量が多いことも、また同様に釣餌としての利用の可能性を想定することができる。幼魚・稚魚の段階にあるサバ・イワシ等の遺体の問題も同様の視点から解釈できるのではあるまいかと考えているが、ただ生態的には、これらの魚種は生長の一定段階に藻場によって混棲する習性をもっており、ブロックサンプル中の魚種組成はその解釈に矛盾のないことをしめしている。とすれば、マグロにカツオ・ブリ等の大形魚が藻場の魚群を追って湾内に入りこみ、それを網でとらえたとすれば、イワシ・サバ等の幼・稚魚が一諸に捕獲されることがあっても不思議はない。しかし、マグロ・カツオに対して釣漁法がとられていたとすれば、イワシ・サバ等の幼・稚魚はむしろそれらの大形魚の生餌として意図的に捕獲されていた可能性も生ずるわけである。釣針の形態から見ても、アグの有無・軸と針先の長さの比率・

フトコロの形態、などから見て魚種のちがいによる使いわけが行われていたことはたしかである。このような系統的な漁撈活動が捕獲の面でのみ展開していたとは考えられず、捕獲物の処理・利用の面でも一定程度の発展があったものと考えなければならない。まことに間接的な根拠ではあるが、貝層a下半から下の各層の基質となるのが、灰であるという事実をここで想起するならば、魚類の捕獲と密着して、ある程度の保存処理を目的とする作業がおこなわれ、その主要なものは燻蒸処理であったと考えることもできよう。

つぎに、南斜面土器群についてのべておきたい。深鉢Ⅲaが代表的な形態として指摘できること、またその装飾モティーフが本来半截竹管文の技法と密接にむすびつく連弧・平行沈線による平行線・山形の組みあわせによって構成されていること、かつ装飾モティーフが、突起・把手と不可分な状態で描出されており、装飾モティーフそのものとしては充分に独立していないこと、さらに成形技法等から見て大木6式の範疇にふくめることができる。

しかし、大木6式の標式遺跡である大木貝塚の資料と比較すると、相対する突起を頂点とする横位の楕円形浮文が見られぬこと、体部の装飾モティーフが描出されるものが少いこと、口縁部装飾モティーフが口縁端にむかって集約化され、その構成が単純化している等の差を指摘することができる。この差異は、清水貝塚に比較的近い位置にある宮城・磯草（高倉　1968）と比較してみてもほぼ同じである。また、正確な比較は困難であるが、松島湾沿岸の諸例と比較して、五領ヶ台系の個体、もしくはモティーフもほとんど見られず、五領台式後半期に比定できるものが1個体見られるととどまっている。反対に、体部調整文としての単斜行および木目状撚糸文が比較的多いことなどは、円筒下層c式との親和性をしめすものと考えられるし、Ⅱa、Ⅲb等の器形のしめる比率が松島湾方面と比較してたかいように思われるという事実も円筒系土器群からの影響の反映と考えることができる。このような特徴をふまえれば、南斜面土器群は大木6式に円筒系の影響のくわわった地方差が比較的つよくあらわれた土器群であり[(1)]、年代的にみても、大木6期後半に比定されると考えてよいであろう。

深鉢Ⅳについては、器形・文様構成・胎土等の点で深鉢Ⅰ～Ⅲ、鉢と特徴をそなえており、貝層aから出土した土器の主体がこのタイプに該当することから考えると、Ⅰ～Ⅲとは年代的な差があると考えることもできる。しかし、貝層aから出土した土器の量はかならずしも多くはなく、決定的な資料とは言えないし、Ⅲbタイプの深鉢を伴出しているので、断定はひかえるべきであろう。なおタイプⅣの深鉢は筆者が糠塚式と仮称した土器群（1965）の主体をなしており、宮城・長根第6層（藤沼ほか　1970）の土器群とも類似する。この土器群を大木7a式[(2)]と理解する見解もあるが、その当否はしばらく措くとしても、南斜面土器群深鉢Ⅰ～Ⅲ・鉢を中心として構成される土器群に後続する土器群のなかでタイプⅣが中心となっていることが宮城県では確認されていること、また岩手・樺山[(3)]（鈴木ほか　1968）等では基本的に共通する土器が出土している事実は指摘しておく必要がある。

最後に、中央部落ちこみから出土した弥生式土器と土師器・須恵器について一言のべておきたい。大船渡湾周辺の弥生式土器については、及川洵による資料紹介（1972）があり、長谷堂貝塚の調査の際にも竪穴住居址1棟が検出されている。また、1972年の分布調査の際、西岸の丘陵地に天王山系の

土器を出土する小遺跡が散在することが知られた。今回、中央部落ちこみから三期にまたがる弥生式土器が出土したことは、大船渡湾周辺に弥生式土器を出土する小遺跡がかなりの密度で散在することをしめすものと言えよう。

三陸沿岸の歴史時代の土器については、北半部の資料は紹介されているが、南半部の資料はほとんど紹介されていない。今回、量的には微々たるものであるが、8世紀末の須恵器導入期のセットを抽出できたこと、さらに9～10世紀の甕に擦文土器と共通する技法が見られることは、一応の成果として指摘できるであろう。なお、出土した甕は、それ自体としては、7世紀にさかのぼりうる特徴をそなえているが、8世紀末の土師器と共伴するものと考えるべきであろう。同様の例としては、水沢市今和泉（1975年度　岩手県教委調査・未報告）の例がある。

〔註〕

(1) 南斜面土器群はあくまでも大木系土器に円筒系の要素が浸透したものと理解すべきものである。その点で、岩手・水切場（鈴木　1958）秋田・狐岱等の円筒系土器に大木系要素の浸透した土器群と対極的な位置にあるものと言えよう。

(2) 山内清男の設定した大木7a式の標式資料（の一部？）を写真によって検討したかぎりでは、大木7b式に混在する異類土器のみを抽出したものが大木7a式であると解しうる可能性もある。筆者が糠塚式なる型式名を提唱したのは、大木7a式なる型式内容が積極的に指摘できえないのではないかという疑問にもとづくものであり、タイプⅣの深鉢とその文様構成を中心とする土器群の内容が正確に規定されれば、それを大木7a式とすることに異議はない。

(3) とくに第3地点第5層にほぼ純粋な土器群の存在を想定できる。（前出 pp. 134～136、PL. 121～123）。北上市周辺では、このほか、鹿島館、鳩岡崎、新平等この土器群を主体とする遺跡が相当数確認されている。盛岡市周辺ではこの種の土器群はさらに円筒的な色彩をつよめ、水切場のごとく円筒系要素を主体とする土器群に移行する。

〔引用文献〕

今泉吉典
1963　「原色日本哺乳動物図鑑」
東京・保育社

伊東信雄
1960　東北々部の弥生式土器
文化　24―1

氏家和典
1958　東北土師器の形式分類とその編年
歴史　14

江坂輝弥・東登
1956　岩手県気仙郡赤崎町清水貝塚
日本考古学年報　5

及川　洵
1972　大船渡市周辺出土の弥生式土器
仙台湾　2
及川洵・遠藤勝博
1975　門前貝塚
大船渡市教育委員会
岡田茂弘・桑原溶郎
1974　多賀城周辺における古代杯形土器の変遷
多賀城跡調査研究所研究紀要　1
浦原稔治
1955　「原色日本魚類図鑑」
「続原色日本魚類図鑑」
東京・保育社
吉良哲明
1964　「原色日本魚類図鑑」
東京・保育社
小林桂助
1965　「原色日本鳥類図鑑」
東京・保育社
鈴木孝志
1958　岩手県岩手郡松尾村水切場遺跡調査概報
上代文化　28：29～36
鈴木孝志ほか
1968　北上市稲瀬町樺山遺跡調査概報　--第3次—
北上市史　第一巻所収
須藤　隆
1970　秋田県大曲市宇津台遺跡の弥生式土器について
文化　33～3
高倉　淳
1968　宮城県気仙沼市大島磯草貝塚出土の土器について
「松島湾周辺の考古学的研究」
仙台・地域社会研究会
坪井清足
1953　福島県白河市天王山遺跡の土器

史林　36—1

鳥畑寿夫

1958　一関市谷起島出土の弥生式土器

上代文化　25

西村正衛・菊地義次・金子浩昌

1958　岩手県大船渡市清水貝塚

古代　29・30合

林　謙作

1965　各地域の縄文文化の発展と地域性　—東北—

「日本の考古学」Ⅱ

東京・河出書房

1970　宮城・浅部貝塚のシカ・イノシシ遺体

物質文化　14

1971　宮城・浅部貝塚の動物遺体

物質文化　17：7～21

1976　亀ヶ岡文化論

「東京考古学の諸問題」

東京・東出版（印刷中）

広島大学生物学会

1971　「日本動物解剖図説」

東京・森北出版

松原喜代松・落合　明

1963　「魚類学上・下」

東京・恒星社厚生閣

宮地伝三郎・川那部浩哉・水野信彦

1963　「原色日本淡水魚類図鑑」

東京・保育社

吉田義昭

1957　「門前貝塚」

高田町教育委員会

Preliminary Report of Excavation at SHIZU Shellmound, Ofunato, Iwate Pref.

Board of Education, Iwate Prefectture.

SHIZU Shellmound is located on the eastern shore of Ofunato Bay, which opens at southern extreme of Iwate Prefecture. In 1959, fairly extensive excavation was carried out by Waseda University, under the leadership of Prof. Masae Nishimura. The present excavation hes been planned to obtain complimentary informations of the preceeding excavatien, while the shell mound is under natural destruction. The project hes been partly financed by Ministry of Cultural Affairs.

The Excavation covered three areas: Central flat, Western shell-heap, and Southern slope. From central flat, natural shallow dip was exposed, and yielded potsherds of Jomon, Yayoi, and Historic Period. Besides potsherds, four burial pits (Pit AF15, AG15-1, AG15-2 and AG18) were exposed. This indicates possible human occupation was concentrated to gently sloping area on the western side of the site (Fig. II-1).

Shell-heap was consisted of four layers, namely shell layer '**a**', '**a-b** intermediate', shell-layer '**b**', infra '**b**', Among which remarkable accumulation of tuna remain was observed at 'a-b' internediate. It was proved that the shell-heap covers a time span of middle Early Jomon through initial Middle Jomon. Through the analysis of faunal remaing it was suggested that the occupants of the site highly concentrated to fishing, particularly of tuna, and sea bream. It is very possible also, that fishing system, was fairly specialized to adapt to particular environment; rocky shore, and narrow channel embracing patches of sandy shore.

Large number of potsherds were excavated on southern slope, the majority was recognized to belong to a single complex,Daigi VI. Typological analyeis demanstrates that it is under slight influence from Ento Potteries. They consist of vessels, and a few bowl. The vessel covers 4 major types, awong which III-a is the most representative. The decorative motives are composed of quardrant ornament focusing on buttons or bridge-like handle, and combio nation of horizontal, clining. or zig-zag pattern.

大船渡市清水貝塚発掘調査概報
（岩手県文化財調査報告第23集）

発　行　昭和51年3月
発行人　岩手県教育委員会
印　刷　㈱熊谷印刷